

玉兔の憂鬱

残解

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一人の大学生が不慮の事故により死亡してしまった。しかし、体から魂のようなものだけが抜けてしまい、目が覚めるとそこはなにもない暗闇だった。

ファンタジーな世界に翻弄されながらも、周りの人間や妖怪あるいは神様などの様々な者たちを助けたり、助けられたり泣いたり笑ったりして、少しずつ強くなっていく話。

更新頻度は1週間か2週間に1回ぐらいです。

目次

序章・月の裏の月	1	序章・第十話	102
転生		序章・第十一話	111
序章・第一話	6	序章・第十二話	119
序章・第二話	15	序章・第十三話	127
序章・第三話	23	序章・第十四話	138
序章・第四話	38	序章・第十五話	149
序章・第五話	46	序章・第十六話	159
序章・第六話	56	序章・第十七話	167
序章・第七話	69	序章・第十八話	175
序章・第八話	79	序章・第十九話	183
序章・第九話	92	序章・第二十話	192
		老章・神の近衛	
		老章・第一話	201

転生

生きているとはなんだろう？

哲学者とか、イキった小中学生が『私は何故生きているのか……?!』等と中二病を発症させたやつが考えそうなことであるのだが、別に自分が哲学者というわけでも、イキった中二病患者というわけではない。

なぜこんなことを考えなくてはならないのか？

何故なら今、俺は、死んだからだ。いや、死んだということを確認した訳ではないけれど……まあ、たぶん死んだと思う。

俺はいつもどおりに朝早く起き、学校に行く用意をして住み慣れた我が家をでる。ちなみに、自分は実家から大学に通っている。一人暮らしする人にはわからないかもしれないが、実家が一番だと思う。

朝、夜ご飯付き、家賃はただという訳ではないが、実質ただである。電気代とか水道代も親が払っているのです、自分が使うお金は、ごくわずかだということだ。これだけの、メリットがあるのに、何故家を出て、一人暮らしをせにやなんのだ。因みにご飯付き

とは言うが、実際に作っているのは自分である。

ここからが本題だ、いつも通り身支度をして家をでたあと、家から一番近い駅にむかった。2 駅通り、大学に近い駅で降りる。たった二駅なので、自転車で普段は通っているのだが、この日の前日にタイヤがパンクしてしまい、自転車は修理に出していた。

昼ご飯を買うため、駅近の緑、白、水色のラインの入ったコンビニに寄る。普段は自分で弁当を作るのだが、この日たまたま寝過ごしてしまい、弁当を作る暇が無かったの
で、おにぎりやサラダというシンプルな食事を買う。自分の好きなおにぎりはやっぱり
鮭で、サラダはおにぎりだけでは物足りないし、炭水化物だけというのも余り好みでは
ないので、買う。レジに商品を持っていき、お金を払いコンビニを出た途端に、俺の視
界に写ったのは、

コンビニに突っ込んで来たトラックだった。

早朝だったから、寝ぼけた運転手が操作を誤ってコンビニにぶつかってきたのだろう
か、もしくはトラック自体に何かトラブルがあったのだろうか。特に痛みを感じる事も
なく、死ぬ間際に感じると言われている走馬灯というものは見られなかった。そういえ

ばコンビニの中いた店員の人は大丈夫だっただろうか？

こんな事があつて生きてる！なんてことはあり得ないという風に思ったのだが、何故か意識がある。人間って意識がなくなる＝死というイメージがあつたので意識があるのには驚きである。が、しかしだトラックに突つ込まれて、人間生きてる訳ない。なのに意識はある。おかしい状況である。

そんな意味のわからない状況で今考えている仮説はこうだ。入れ物となる肉体は壊れたけれど、魂とか自分や現代科学にはよくわからないものがあり、それが体から抜けたのではないかと。なんとも現実からかけ離れた仮説であるのだ。自分でもあり得ないと思つているのだが、それ意外に思いつかなかつた。

そんな今の状況なのだが、

何にも見えない。

何にも触れられない。

手足の感覚すらない。

といつたところか。当然といえば当然なのだろう。魂は概念というものではなく実際に、自分たちの中にあり、人間の思考や意識を司つているのだ。つまり、魂だけの状

態だと実態がないということだ。これらが事実だとすると、今の状況にも領ける。実態がなく、我々生命が外界から情報を得るのに必要な感覚器官がないから、なにも感じる事ができないということ。

しかし、これが分かったところで今の状況が変わることはないのだ。まあ、これがあつてるかはわからないけれど。

この説を証明するために色々やった。体を動かそうとしてみたり、ない目で何か見えないかと凝らしてみたり。がそれも今、これ以上の結論身体が出てこなくなったため、することがなくなつてしまったのだ。あの忙しかった現代社会が恋しくなってくる。早く終わらないかと思うが無駄な足掻きだろう。

○

あの時からどれぐらい経ったか、暇な時間にも馴れて来た頃。ないはずの目で捉えた

ものが一つあった。最初は小さな光だったのだが、時間が経つにつれ、だんだん大きくなっていた。いや、近付いて来ているようにも見えた。俺は藁にもすがる思いで実体のない体で光にむかって走った。跳いた。いや、身体がないので動いていたかもわからない。

ともかく、光に近付こうと全力だった。

どンドン光が近付いてきて、俺が触れた瞬間、視界が真っ白になった。その後しばらくたつて、身体が重く感じるようになった。

いままで無かったはずの目を開けたが全く何も見えなかった。ぼやけて物の境界線が曖昧になっていた。少し時間が経つと視界が戻るとともに周りが良く見えるようになった。そんな目に最初に入つて来たのはくすみの無いきれいな白。よくよく見るとモフモフの毛布だろうか、俺の下に敷かれていた。とても柔らかく、肌触りが良い。次に身体が動くのを確認し、自分の様子を見てみると、我が身はなんとも小さな赤ちゃんボディではないか！これには混乱する。元々そこそこ高い身長があったのに、今はだだの赤ちゃんである。それに、何故か頭の上に違和感がある。が、その違和感の正体を確認する間もなく、眠気が襲いかかってきた。

いつぶりかもわからない重たい体に眩い光。そして、激しい眠気になど抗えずに、俺はまぶたを閉じ、意識を手放した。

序章・月の裏の月

序章・第一話

「ふわあ……」

ベッドから起き上がり、身体をほぐす。かなり長い時間寝る事がなかったからか、少
し体がダルい。まあ、なにも感じなかった時よりましだろうが。

俺が今いるところは病院の一室のようだ。タイルの貼られた壁に、病院によくある
カーテン等々。それに少々薬臭い。赤ちゃんボディなのであまり動くことはできなさ
そうだが。ベッドから落ちないようにゆっくり立ち上がる。

うん、背が低い。まあ予想通りだが

やはり元が大学生なので、自分の背が低いと少し落ち込んでしまう。110センチ無
いくらいだろうか。成長していくだろうが、なんか嫌だなあ。性別は前世と同じで男。
流石に女性だと、羞恥心だったりでヤバかったので、助かった。しかし、この身体になっ
てから何か違和感を感じる。

コツ…コツ…

足音がいくつかこちらに近付いてくる。誰か来たのだろうか。俺は今産まれたばかりなのにいきなり起き上がっているので、変な誤解を避ける為に、ベッドの中に戻る。急いで戻ったので顔の前に白い何か落ちてきた。何かと思い、引つ張つて見ると今度は自分の頭が引つ張られた。

「これは……………」

「(ハハ)かしらっ?」

「はい、八意様。」

「こちらに問題になっている玉兔がいます。」

三人部屋に入つて来た。二人は男の人で、後、一人は女性だろうか。たしか今、八意と呼ばれていた人だ。そして、今の会話で確信がついた。俺の頭の上に付いているのは……………

兔の耳だ。

うさみみとは思ひもよらないものが頭の上に付いていたのに、全く気が付かなかつた……………

それにしても何で兔なのか。先ほどの会話を聞く限り、「玉兔」という単語がでてき

た。玉兔とは、月に見える餅を付いているように見える兔のこと。じゃあここはもしかしてだけど……

月かな？

流石に声は出さなかったが内心すごく驚いている。まだ、确实とは言えないけど……
「あら、綺麗なオッドアイじゃない。珍しいわね。」

「はい、赤と青の濃い色は初めて見ます。玉兔は基本赤色だけですのぞ」

こちらの顔を覗いてきて、八意と呼ばれる人がそう言った。気付かれないように、薄目でそちらをみる。珍しい服装だ、赤と青のツートーンカラーの服つて……

月では普通なのだろうか？

そういえば、オッドアイつてカラコンでもいれなきゃできないんじゃないのか？ デフォルトでオッドアイ何て珍しいどころじゃないだろう。

「それで、何故私を呼んだのかしら。わざわざ一匹の玉兔の目を見せる為だけに呼んだ訳ではないでしょう？」

「実は……」

「この玉兔の能力が、わからないのです。」

八意さんの質問に対し、二人の男の人が答える。
能力って……

これは明らかに、自分の暮らしていた世界ではないだろう。月の兎だったり、オッドアイだったり、まさにファンタジーだ。まさかのファンタジー世界に転生なんて、笑えない話である。

「何故かしら、玉兎の能力は全て同じなはずよ?」

「はい、この玉兎は普通の玉兎と同じ能力を持っているはずですよ。」

「しかし、玉兎から本来出ている波長がないのです。」

「波長が?」

「はい」

男の人二人がそう答える。なるほど、俺は玉兎に転生し、オッドアイで、ここでの普通の玉兎にある波長を持っていないらしい。

「波長が違うとかそういうのではないの?」

なるほどわからん

「いえ、波長そのものが無いので、ビックリしましたよ」

玉兎に転生したのはいいとして、いや、良くないが、波長?能力?なんだそりゃ!!あーもう!誰か説明してくれ……………

そんなふうにしても誰か教えてくれるわけもなく、ただ頭を抱えるしかない。

「……………」

「どうでしょうか？」

「……………私でも分からないわ。」

「これは……………」

「ええ、月詠様のところに連れていくしかないわね。」

○

今、俺は八意さんにベッドごとどこかに運ばれている。

おそらくは先ほどの会話に出てきた、月詠様なる方のところに行くのだろう。「月詠」というのは、確か、古事記にでてくるイザナギが御祓を行った時に産まれたとされるツクヨミのことを指しているのだろうか。

ちなみに御禊とは、イザナギが黄泉の国から帰って来たときに、黄泉の国の穢れを払うために行つた行為で、普通はきれいな水で身体を流すことを指す。その時産まれたのが、天照大御神、須佐之男命、月夜見尊と言われていたはず。

おそらくその月夜見尊のことを指していると思われる。月に兎がいる世界なのだ、日本神話に出てくる神様がいてもおかしくない。乳母車。俗に言うベビーカーが止まり、目の前には馬鹿みたいにかい扉が鎮座している。

ウイーン

扉が開く。

もつと重厚な扉でゴゴゴゴと大きな音を立てて開くと思つていたが、案外軽い音で開いたので驚いた。大きさを例えれば、三階建てのビルぐらいあるだろうか？かなり大きい扉がウイーンと開く様子は違和感がすごい。

「失礼します、月詠様。」

「ん、来たか。」

八意さんが真ん中の椅子に座っている人に礼をする。あれが、月詠様だろうか？

パツと見ただの若い男性にしか見えないのだが、髪の毛の色は透き通るような白で、

服装からは非常に威厳を感じる。

「こちらが先ほど連絡した玉兎です。」

「ふむ」

こちらをじつと見てくる。あれだけで能力のこととかがわかるのだろうか？ いや、名前からして凄い力を持っているのはわかるので出来るのではないだろうか。説明してくれるかどうかは解らないけれど。

○

月詠様の表情が変わった。普段、私たちに対して感情を見せることなどない。常に冷静で無表情だ。まあ、やっていることは子供染みているけれど。しかし、この玉兎を見始めたときと比べると、表情が浮かべる。「うーん」と言いながら。

この玉兎なにを持っているのか。もしくはそれ以外の事か。しばらく、静寂が走る。これをどうにか終わらそうと、私が声を出そうとする前に、月詠様が声を出す。

「部屋に戻ってもいいよ」

そう言われて少し驚いた。今、戻れということは私にこの玉兔の能力を言えない、ということであろう。月の賢者である私にも言えないことなのだろうか。何分始めての事なので、非常に興味がわく。

「わかりました」

だから、聞いてみる事にした。

「ですが、後で教えて貰ってもよろしいですか？」

少し悩んだ後

「うん、言える時になったらね」

また、驚いてしまった。

駄目元で聞いてみたのだが、まさか了承されるとは思いもしなかった。まあ、言える時というのがいつかはわからないけれど。

「では、失礼します」

そう言って、月詠様の部屋から出た。

どうしよう。月詠様なる方と二人きりなんだが！八意さんが出ていったせいで俺の

中では1対1の生徒指導みたいな雰囲気になってしまっている。ここからどうなるのかが、全く読めない……逃げようにも、逃げる場所もなく、ただ向こうの行動に従うまでである。

まあ、バレてないかもしれないからね！

そんなことを考えていると、急に質問が来た。

「ねえ、私以外はいないから喋ってもいいよ。起きてるんだよね？」

あれ？

まさかこればれていらっしやる？神の能力とかそういうのでわかったのだろうか？俺は一言も喋っていないし、バレてしまうような証拠を残した覚えもない。しかも、目を俺から離すことなくじーつとこちらを見てきている。確信に満ちた目は自分から目離すような素振りも見せない。これに対してはこう答えるしかなかった。

「は……はい。」

ただの返事である。

序章・第二話

八意から急に連絡が来た。

珍しい、あの娘が私に対して連絡をしてくるなんて。

八意は、基本的に自分でだいたい何でもすることが出来る。それ故、誰かに頼ったりすることがない。が、今回はあの娘でも解決出来ない問題が出てきたようだ。

その問題とは、ある玉兔の能力がわからない。とのことだ。玉兔は基本、皆同じ能力を持っている。

『波長を操る程度の能力』

それが玉兔の能力だ。

我々が月に来る前からいた玉兔たちは集団で暮らしていて、集団で暮らす以上は意志疎通が出来ないといけない。しかし、月に酸素がなかったので音が伝わらない。つまりは音による会話ができなかった。その代わりに玉兔たちは兔の耳から電気の波長を操り、テレパシーとしてつかったのだ。

希に通信以外のものも操る者もいるので『通信をする程度の能力』とか、『電波を飛ばす程度の能力』ではなく『波長を操る程度の能力』と呼ばれる。

その玉兎たちが操る波長というのは自然界においてありふれたもの。例を挙げるなら、音の波長、精神の波長など、数え切れないほどある。その中で玉兎が扱うのは『通信の波長』。

これを操り、通信機無しでも、仲間の玉兎と連絡を取り合うことができる。

しかし、報告を聞く限り、その玉兎には玉兎の特徴でもある、『波長を操る程度の能力』どころか、自然界、特に生物は必ずといっていいほど何かしらの波長を、出しているはずなのに、その波長がない。

『波長』、それ事態が全く無いのだ。一度、その玉兎は死んでいるのだと思った。だが、診たのは月の賢者であり、月の頭脳であり、薬師でもある、八意だ。そんなミスをするとは思えない。

だから、自分で見て見てみることにした。

普段、私は部屋に誰かを呼ぶことはない。唯一、呼ぶことがあるとすれば、私の姉と弟ぐらいだろう。それだけ、私が部屋に誰かを呼ぶことはない。いつも私が八意たちと会うのは会議場だから、電話の向こうで八意が驚いているのが良くわかった。『えっ、よろしいので?』と驚いている声を聞いたのは面白かった。

しばらくすると、例の玉兔を八意がつれてきた。一目見ても、見た目はただの生まれたての玉兔で、何かおかしいところはない。しかし、何かはわからないが、違和感を感じる。

その違和感を突き止めるため、私の『神』としての力を開放する。

『神眼』

これは、上位の神が扱うことが出来る術で、見たものの能力や持っている力を見ることのできるものだ。この術のルーツは神通力から来ていて、大体のことはわかる。名前に関しては、姉が勝手に決めたのだが、変えるわけにもいかないし……

まあ、それはともかく、それで目の前の玉兔を見る。

なるほど、これはわからないわけだ。

この玉兔、普通の玉兔ではない。

八意が少し驚いているが、気にせず、集中して見る。

……ああ、なるほどそういうことか。

○

さて、どうしたらこの視線から逃げるかが出来るか……

俺は先ほどから身体をなめまわすように、ジロジロと見られている。何故こうなったか。

早速、月詠様という人に正体がばれた。たぶん。

神の力とでもいうのだろうか、自分の見た目は赤ちゃんに対して、「喋ってもいいよ。」などと、言えるということは何かしらの確信を持って、言っている以外考ええられない。実際に神かどうかは、解らないが。

「ふむ、君は何者だい？」

あれ？

「あ、あの、」

「なんだい？」

「てつきり、全部分かっているのかと……」

「いやいや、君の存在自体がよくわからないから、聞いているんだ。」

ええ……………

分かっていると思って聞いて見たのに、まさか、わからないとは……………
身構えて損した気がする。

今は、自分の身に起きたことを話した方が良さそうだ。

「どうだい？答えられるかい？」

「はい。実は……………」

く玉兎説明中く

「ほうほう、それで起きたらそんな姿になっていたと。」

「はい……………」

とりあえず一通り説明し終わった。月詠様も納得してくれたようだ。

「それで、能力とかは、まったくわからないと。」

そりゃそうだ。こちとら元はただの人間である。そんなものがわかるわけない。

「……………」

「なに。そう落ち込まなくても大丈夫だよ。」

不安という感情が、顔に出ていただろうか。だが、心配とは違う、不適な笑みを浮かべる月詠様。それに背筋が凍り、無意識に身構える。その一言に、

己の不安が、杞憂だったことを覚った。

「君を私が鍛えてあげよう！」

「へっ?」

堂々と胸を張って高らかに宣言したからだ。

「という訳で今日から私が君を鍛えていくよ。」

俺は月詠様に鍛えられることになった。

もちろん、理由はある。

能力のわからない危険な存在である俺を、この『月の都』にほったらかしにするわけもいかない。よって、誰が管理しなくてはならない。そこで、月の都でトップだが、比較的暇な月詠様がその管理をすることになったのだ。

俺からしたら凄くありがたい。

わからない能力で周りに迷惑をかけてしまっただけではないからだ。それに、この世界のことを知る事ができるかもしれない。そんなことを考えていると、月詠様が質問してきた。

「君に名前あるだろう？ずっと君呼ばわりじゃあ、悪いからね。」

名前か、俺の名前は……

あれ？何だっけ？

「どうしたの？」

「いえ、名前が……」

「思い出せないのかい？」

「………はい」

何故だろうか？全く、思い出せない。20年間以上、使ってきた名前だ、そう忘れるものでもないと思うのだが？

「君が君の名前を覚えてないのはね、実は言うとなんなんだよ。」

「とうとう？」

「名前と言う物は魂ではなく、肉体に刻まれるものだからね。」

肉体、つまり身体のことだ。俺は自分の名前が刻まれている身体から、魂が抜け、転生した。つまり、俺は今、名前がないのだ。月詠様の言うことが正しいのであれば、そ

ういうことになる。

「だからね、私は考えたんだ、君の名前をね。」

「君の名前は……………」

レイだ。

「レイ、…、ですか？」

「そう意味は、何も無いということ。何も無いと言うことは、何にでもなれるということでもある。レイはこれからある意味、第二の人生、いや、兎生か。それはどちらでもいければ」

「それを始めるんだから、前世何ていう余計な物をは、必要ないと思うんだ。だからね、気にしなくて良いよ」

そう言って月詠様は、俺にハンカチを渡してきた。

渡されて、気が付いた。

赤と、青の二つの色を持つ目から、水滴が流れていたことに。

序章・第三話

涙とはなんだろう。

それは、どのような時に流すのだろうか。

答えは簡単。

感情が、ある一定のところまで上がると涙を流す時がある。ある者は、家族やペットを失ったことによる悲しみや、寂しさ、あるいは自分に対しての不甲斐なさから、涙を流す。ある者は、何かを為し遂げ喜んだり、誰かから話を聞いて、それに感動したりして、涙を流す。

つまり涙とは、プラスの感情とマイナスの感情で出来ている。

○

俺は、今どんな感情で泣いているのだろうか。

こんな、簡単な答えはすぐにでる。

悲しみだ。

寂しさだ。

色々ありすぎて、泣く暇もなかった。

自分が先に死に、家族や友達を。大切なものを全て置いてきてしまったのだ。これが悲しい以外に、なにがあるか。

泣き止もうとしても、止まらない。むしろ、涙の量が増えたような気がする。

「ヴええ……」

月詠様に話しかけようとするが、ホラー映画に出てくるゾンビみたいな呻き声しかで

ない。そんな状態で、話しかけるとどうなるか。

「すみません、ばたじにはんがちをがちてくれませんが？」

鼻声である。

「ヴァ」

…………… また変な声が出ってしまった。

く玉兔落ち着き中く

「落ち着いたかい？」

「はい。」

「……………あの、」

「なんだい？」

「ハンカチ、洗って返します。」

そう、鼻水や涙がくつついて、ぐちゃぐちゃなのだ。めちゃくちゃ汚ないと言わざるを得ないだろう。しかも、それは他人の物なのだ。きちんと洗って返すのが常識だろう。

「面白いね、レイは。」

「面白い？」

「そう。さつきまで泣いていたとは思えないほど落ち着いている。そう言うことが面白いんだ。」

「それが面白いんですか？」

「うん、面白いよ。すつごくね。」

「元人間とは思えないほど。」

「はあ。」

よくわからないが、俺は面白い？らしい。月詠様の面白いという基準はわからないが。

「あつ。」

「？」

「そうそう、さつき思い付いたんだけど……レイにね私の、側近になって欲しいんだ。」

「えっ？」

俺は驚くしかなかった。

というか、さつきから驚いてばっかだ。

「いやいや大丈夫だよ、側近といっても私の話し相手になつてほしいだけなんだ。」

「何故……でしようか？俺よりも面白い話をしてくれる人はたくさんいると思うのですが。」

そう、その通りだ。

自分よりも優れた人はこの月にも、沢山いるはずだ。ましてや月に人がいるのだから、いない方がおかしい。

「いや、そう言うことじゃないんだ。」

「ですが、、」

「居ないんだよ。」

「え？」

「話し相手がね。」

「……………」

場に沈黙が走る。

「何故ですか？」

最初にそれを壊したのは、俺だった。俺のせいで月詠様を悲しそうな顔にしまった。これをどうにかしようと動く。

すると何かを決めたのか、こちらを向いてきた。

「最初はね、皆、同じような立場で話してくれた。」

「だけど、私が神だと知ったとたん崇め讃え、誰も話してくれなかった。」

「何かを聞いても、月詠様のお手を煩わすものでもないとか、いつも、言われる。」

「だから、レイには、私と同じ立場で、私と一緒に話してほしいんだ。」

………そんなこと断れる、いや断るわけがない。始めての会った人にこんなに優しくしてくれたら、荒唐無稽な自分の説明を何も言わずに聞いてくれたそんな人の頼みなんて、断れる訳がない。

「分かりました」

「いいのかい？」

「はい、もちろんです」

了承の意を伝える。

すると、嬉しそうな顔でこちらを向いてくる。

「……………ありがとう、これからよろしくレイ。」
「こちらこそよろしくお願いいたします、月詠様。」

○

「そういえば、なんで私に敬語を使っているんだい？」

「いえ、目上の人には敬語が良いと思ったからです」

「じゃあ使わなくてもいいよ」

「これは月詠様に対する敬意です」

そう言うと、むっとした顔で、

「それは私を崇め讃えた人々と、一緒だと思うのだけれど。」

「いいえ、違います。これは感謝です。色々して貰ったことへの」

少し、顔をしかめ「うーん」と、悩んでいる。

「どうしてもダメかい？」

もちろんダメである。

「ダメです。譲れません。」

先ほどよりも、さらに顔を悔しそうにしかめた。

く玉兔抗議中く

「分かったよ……………」

三時間ぐらい同じようなやりとりを繰り返し、やっと月詠様が折れた。良くもまあ、三時間も同じことをやっていられる。それだけ、嫌なのだろう。だが、敬意を払っている相手に呼び捨てなどと、度胸のいることはできない。それを譲らなかったので少し落ち込んでいるが。

「まあ、いいか。」

フウーとため息を付き、こちらを向いてきた。なんだろうと月詠様の顔を見る。

「レイ、後ろ向いて貰えるかな」

「え、何故ですか？」

「いいから、後ろ向こうか」

そこそこ、圧のかかった声で言ってくる。俺が敬語を止めないのを根に持ったのだから、少し強引にやってくる。少し強く頭をつかんできて少々痛い。

「……何をするつもりですか？」

疑問に思ったので聞いてみる。怒っているにしても、何をやるかはわからないから聞いているのだが。

「まあまあ、すぐ終わるからじつとしててね」

「え、ちよっ……………」

バチツ

何かか頭に当たったように、強い衝撃が脳に響く。

次の瞬間、俺は意識を手放さざるをえなかった。

「これでいいかな。」

少し息を吐き、椅子に腰掛ける。やはり、神力を誰かに移すのは、慣れない。なんか違和感を感じてしまうからなあ。

そう考えながら、ベッドで眠っているレイを見る。寝かせたのではなく、私が気絶させたのだけだ。

それにしても久しぶりだった、誰かと普通に会話するなんて。

やはり、誰かと無駄話をしたりして笑い合うのはとても楽しい。姉や弟と話すのもいいけれど、最近では地上を構築するだとか何だとかで忙しいので最近は来ていない。そのせいだろうか、人と話すのはまた、楽しく感じられる。まあ、人じゃなくて兎だけだ。

目が覚めると、自分は部屋のベッドに寝かされていた。ベッドの隣には椅子に座って本を読む月詠様がいた。直ぐ様起き上がり、不機嫌そうな顔で月詠様の方を見る。

「おや、起きたね」

そう爽やかな顔で言ってきた。くっ！気絶させた帳本人のくせに！まあ、月詠様への憤りは置いておこう。とりあえず、先に確認するものがある。

「何をしたんですか？」

月読様が、なにをしたかだ。気絶するほどのことを何故かされたのだ。何をされたのかは気になるところである。そんな、率直な疑問に月読様はこう答える。

「それはレイが一番、わかると思うけれど」

「？」

俺が一番分かる？特に変化はないはずだけれど。どこが変わって、あれ？

「取り敢えず、立ってみてくれるかい。」

「え？あ、ハイ。」

少しニヤニヤしていた顔をして立つことを促してくる。立ってみればわかるのだろうか？他に成すことがなかったので、とにかく立ってみる。

「あれ？」

立った瞬間、疑問が浮かび上がって来る。

『あれ、こんなに背高かったっけ？』

いや、もつと低かったはずだ。……………まさか、これ、

「成長してる？」

「そうそう、ある程度大きくなってもらいたかったからね」

成長しているといっても、小学校3〜4年位の身長しかないけれど……………それで

大きくなってもらいたかった？」

「何故ですか？」

「そりやあんな赤ちゃんの格好で歩き回られたらこまるからだよ。」

「？」

「あーごめん、言い方間違えたね。」

「部屋を用意したから、そこに行つてほしくてね。」

「それまでに、廊下とか通るからね。」

そういうことか。確かに、赤ちゃんが廊下が歩いていたら、びっくりするし、不審にも思うだろう。つて部屋？何で？そんな疑問に対して月詠様はこう答える。

「レイは強くなるまで、基本的に私の回りに居て貰うからね私。の周りのやつらは、産まれたばかりの玉兎が私の側近になるなんて、認めないから、それまでレイは私の近くにいてもらうよ。」

「面倒臭い人たちがいるんですね」

「そうそう、口うるさくつてねえ、何かといちやもん着けてくるから、面倒臭いんだよね。」

めちやくちや嫌そうな顔で話す月詠様。どんだけ嫌なんだ。

「それで、良いかな？」

「あ、はい」

了承の意を伝える。

俺としても、この体に慣れるまでの時間が欲しかったので良かった。それにしても、周りのやつらとは？まあいいか。なにか事情があるのだろう。深掘りするのは良くない。

とにかく、俺は月詠様に感謝の意を伝える。色々なことをしてもらったのだ、感謝するのは当然だろう。

「ありがとうございます。」

「ん、何がだい？」

「何から何までしてくれて、ありがたいということですよ」

「なに、成り行きだよ」

そう言つて、軽く流す月詠様。本当に感謝しかない。これから、恩返し出来るように頑張ろうと心に決める。頭を上にと上げると、何やら後ろでござござなにかを探している。

「ん、あつたあつた。」

「何がですか？」

「レイが行く部屋の鍵と、案内用の端末だよ」

「えっ」

「もしかして案内して貰えると思ってた？」

「……はい」

「まあ、案内してあげても良いんだけど、仕事が残ってるからね、ごめんね」

「いえ、そんな……」

そう言つて、渡してきた。鍵と、端末………つてスマホじゃあないか、鍵もカード型で、スマホは滅茶苦茶薄い。自分が使っていたスマホの半分位の厚さだ。

「ありがとうございます」

「使い方は分かるかな？」

「はい、前世でも、似たようなのがありましたので」

月詠様に部屋の鍵とスマホみたいな端末をもらい、月詠様の部屋からでようとノブに手を掛ける。

「では、失礼します」

「うん、また明日」

「あ、忘れるところだった。」

「？」

「明日もここに、来てくれるかい？」

「分かりました。失礼します」

ウィーン

やっぱり、違和感あるなあ……………この扉……………
まあいいや、とりあえず、部屋はどこにあるのかな。

序章・第四話

さて、困ったことになった。

何が困ったって？

「……は……か。」

普通に迷ってしまった。

まあとにかく広すぎる。何なのかこの広さは。廊下の幅が100mぐらいはある。とにかく広すぎて迷った……………

そういうえば、月詠様からスマホみたいなものを貰ったんだった。早速、ポケットから出し、画面をつける。何度か電源らしきボタンを押しているが、出てくるのは赤いバツマークのみ。

うん、これは……………

……………充電がない！

まさかの充電切れである。

月詠様の部屋の場所も、もうどこかわからないし、どうしようか……………充電がないの

で、どこに部屋があるかもわからない。誰かいないかな？ だけれど、見渡す限り、人はいないし、気配も……

コツコツ

……しないことはない。

タイムリーである。なんともすごい偶然だ。どこからだろうか、一人……いや、二人かな？ こちらに近付いてきている。音がする十字路を覗くと、いた。

一人はピンク色の髪で、腰に刀を差している。もう一人は金髪で、片手……いや両方の手に、あれは桃か。それを沢山積み重ねて持っている。あれどうやって持っているんだ？

そうやって見ていると、急に目があった。

え？ ちよつとまって、ピンク色の髪の方が人が刀を抜いて、むかって来てるんだが!?

「ちよ、ちよ、ちよつと待って！」

私はいつもどうり、月詠様の屋敷を巡回していた。そこに偶々であつた、お姉様が乱入してきた。月詠様の屋敷の中でも気にせず私の横で、桃を食べる。全く、いつでもどこでも桃を食べたがる癖は直すように、言っているのに、全然直す気がない。

ちなみに桃は月で最も有名な果物だ。森に入れば、桃の木で溢れかえっていて、いつでも桃を食べることが出来る。あの取れたてを食べると、いつでも食べたくなってしまふ気持ちもわかるけれど。

私はいつも屋敷を巡回しているが、いつも特に変化などない。

今日も、いつもと同じルーティンをこなすだけだと思っていたが、どうやらそうにもいかないようだ。

何の連絡もないのにいる一匹の玉兎。服装は、ゆったりとした浴衣。体軀も小さく、イーグルラビーではなさそうだ。迷つたなどの理由はあるかもしれないが、結局は侵入者。それに月詠様のお屋敷は蟻一匹も入れない程の厳重な警備なのだ。ただの玉兎が

入ってこれるはずもない。私は刀を、問答無用で引き抜く。

一瞬で玉兔の目の前に移動。そして、峰打ちを狙い首元めがけて刀を振るう。

だが、その刃が届くことはなかった。

何故か？理由は簡単。

何故か刃が届く前に、刃が『止まって』いるのだ。もちろん、ピンク色の髪の彼女、綿月依姫が刃を止めたわけではない。刃が当たりそうになったときに、急に刀が動かなくなつた。

「えっ？」

これには月の使者の依姫も、ただただ驚嘆の声をあげるしかなかった。

○

何で刀が止まったのだろうか。目の前の人々が止めたとは考えにくい。しかも、不自然に動きが止まっていた。誰かが止めたのか？

「はいはい、そこまでよ依姫。」

「お姉様、侵入者ですよ？」

「まったく、まだまだね依姫も。その玉兔を良く見てみなさい。」

姉らしき人にそう言われて、ピンク色の髪の人が俺の方を見て来る。

「……………あ、」

「ね、ちゃんと持っているでしょう。通行証。」

「通行証？そんなもの貰ってないが……………」

金髪の人の視線を追ってみる。彼女が見ているのは、俺が月詠様から貰ったスマホだった。まさか、これ色々な権限の詰まっている物なのだろうか。

……………まあ電源切れてるけど。

「すみませんでした」

ピンク色の髪の人が謝ってきた。

「えっ、ああ、いえ、何か怪我とかをしているわけではないので、大丈夫ですよ」

少し慌ててしまったが、

「本当にすみませんでした」

特に怪我はしていないので、問題はない。かなり、ビビったが。

「ねえ、貴方、桃は好きかしら」

金髪の人が聞いてきた。唐突すぎではなかるうか。まあ、いいか。それで、桃か……甘くて、あの果汁が堪らなく美味しいので個人的には好きである。特に否定する理由もないので頷くと、目の前に桃が1つ迫っていた。

「あなたにも、1つあげるわ。たくさん持つて来すぎて困っていたから」

「え？あ、はい、ありがとうございます。」

何か急に桃を渡された。月詠様の部屋から結構歩いて疲れていたので貰わない手はないと思い、手に取る。とりあえずかじってみる。

……うまつ。

なんだこれ、うまい。噛んだ瞬間、果汁が溢れんといわんばかりにでてくる。その果汁は、とても甘くて美味しい。かといって、甘過ぎない。しかも、それに加えてこの身の柔らかさだ。この桃はとても美味しい。それはわかる。食べた瞬間に、頭の中に桃園が展開されるほどうまい。

「美味しいって顔しているわね」

それに対し激しく頷く。しかし、しかしだ。何でそんなに桃を持つてきているのか。

両手には、垂直に詰まれた桃が5個ずつ。どうやって持つているのだろう。不思議でならん。まあいいや、とりあえず部屋の場所を聴かなくてはいけない。

「それで、あなたはここにをしていたのかしら？」

当然の疑問だろう。何をしていたのかは、確認しなくてはならないだろう。ちょうどいいので、部屋の場所を教えて貰おうとあの鍵を出す。

「あの、この鍵の部屋に行きたくて」

「少し、見せて貰えるかしら？」

そう言つて鍵を渡す。

ピピッ

例のスマホをポケットの中から取り出し俺の鍵をスキャンする。今さらだけど、カードキーである。

「あーここね、後12部屋ぐらい、先ね。」

二人が来ていた方向を指さして言う。

「ありがとうございます。」

感謝の意を伝え、部屋に行く。切られなくて良かったと思いつながら。

それから、何事もなく俺の部屋？に着いた。鍵を使って、中にはいる。内装は、ごく

ごく普通の部屋で和洋冷暖房完備。しかも、風呂や、キッチンまで着いている。ビジネスホテルみたいな感じで、部屋真ん中にそこそこ大きなベッドが鎮座している。ポフツといひ音を立てて、ベッドに突っ込込込む。旅行とかに来たときに毎回毎回やりたくなってしまう。

まあ、旅行気分にはなれないが。

「うお」

なんてこつたい、顔がベッド突き刺さってしまった。なんて柔らかさだ！俺の部屋にあった某人をダメにするソファよりも食い込みがすごい。そのせいでなんとか抜こうと引つ張ったり、足をバタバタさせてみるが全くもって動かない。

「……………」

なんか眠くなってきた。やばいやばい、このベッド絶対、眠らせに来ている。地味に温かいもん、このベッド。これが月の科学か！そんなことよりこのベッドから出なければ。スマホも充電しなきゃならないし、風呂にも入りたいのだけれど……………

そんな、意志も眠気と転生やら切りつけられたりした疲れも相まって消えていく。月の使者や月の賢者でさえも眠らせてしまう魔のベッドの前では、無力だった。

序章・第五話

昔、地上には大きな都市があつた。

そこには沢山の人間たちが平和にくらしていた。

そこは神々の支配する都市で、周りにはとても高い壁があり、

人間を襲う妖怪達から守っていた。

妖怪は生き物に寿命を与える穢れを持ち、人間はそれに恐怖していた。人間は穢れから逃げようと、穢れない月に行こうとした。

月に行く当日、妖怪達が都市に攻撃を仕掛けた。何故か、理由は簡単。妖怪達の力の源は人間の感情から出ている。人間が地上から居なくなると、妖怪も消えてしまう。それを防ぐために妖怪は全力で止めようとした。これを、人妖大戦という。

人間達は必死で攻撃を防ぎ切り、月に行くことができた。

しかし、月に着くと沢山の兔がいて、月で暮らしていた。持ち前の科学力を武器にして、兔を従えた。この兔達が今の玉兔だ

そして、兎達と協力し……………

今の都市を作り上げたというわけだよ。」

「おー」

今、月詠様の月の都の歴史を簡単に聞いている。まさか、月に生物が住んでいたとは思わなかった。しかも、地上にはたくさん妖怪がいて人間を襲っていたなんて、俺が住んでいた世界では全く信じられない話だろう。まあ、俺も兎耳あるし、今ならば理解できるが。

「いやー誰かこの話をするのは初めてだよ。」

「そうなんですか?」

「うん、みんな知っているし、産まれた玉兎には他のヤツが教えているからね」

今さらだけど、月のトップと普通に会話できるのは何気にすごいことではないだろう。他の玉兎たちは他の人に教えて貰ったりしていると言うし。

「とりあえず、目は覚めたかい?」

「はい……………すみませんでした」

ここは俺の部屋で、ベッドの上である。気付けのために話をしてくれたのだ。

……………まあ、要するに起こして貰ったということだ。

俺は昨日、魔のベッドの誘惑に勝てず寝てしまった。しかも、朝の9時まで!これが

普段の朝なら大学の講義をサボるのだが、今回は人を待たせていたので早く起きなくてはならないのに、寝坊してしまったのだ。本当に申し訳ない。

急いでベッドから出て、シャワーを浴び、置かれていた服を着る。これは月詠様が用意してくれていた服で、サイズもピッタリのこと。いつ測ったんだか。さて、洗っている今気付いたんだが、兎耳めつちや邪魔である。服にも引つ掛かるわ、頭洗う時に顔にガンガンあたる。まあ、慣れていくしかないか……

さて、月詠様が用意してくれた服は洋装で昨日までの浴衣とは違い、まさに今から運動するぞ！という意気込みが感じられる服だ。体操服みたいなもので、動きやすい。今日から訓練が始まるのだろうか？

「おー似合ってるね。」

「ありがとうございます。」

「玉兎の体操服余っていて良かったよ。」

あつやっぱり体操服なんだ……

「それじゃ行くよ。」

く玉兔移動中く

着いたのは大きな剣道場のような場所でも広い。普通に天井が見えない。剣振ったりするならば、もう少し狭くていいと思うのだが。そんな感じでブーツとしていると、

「レイ、こっつちこっつち」

月詠様に呼ばれたので少し駆け足で月詠様の後へついて行く。

何やら倉庫みたいなどころに入っていく、中には大量の刀、槍、銃、薙刀など、沢山の武器や武具が置いてあった。

おそらくだが、これらで鍛えるのだろう。

「この中からレイが好きなものを持っていってくれ。」

「この中からですか……………」

こんな沢山ある中から一つ選ぶのか……………

カッコいいとか見た目から決めるのはよくないだろう。まあ、どうせ使うなら刀が良

いかな。高校の授業で、ちよつとかじった位だけれど、扱ったことがあるのはそれぐらいだ。

とにかく、今の小さい自分に会う、軽くて実用的な物がいいだろう。そう思って、目の前の短刀を手に取る。

「うわ」

思いの他重たく、落としそうになってしまった。短刀でこれなのだから普通の刀なんて、持てないだろう。何か軽い武器はないかな？

三時間ぐらい迷っても未だに自分に合った武器がない。全部が重たかったり、大きかったり。実際に振ってみたりがなんかしつくりこない。月詠様を待たせているので、早く決めたいところだが。

そんなこんなで全く見つからないので唸っていたところふと、視界に入った刀があった。黒い鞘で特にこれといった特徴はない。あるとすれば、普通の刀より少し長い位だろう。刀は重たいので諦めていたのだが、気になったので手に取ってみる。

しつくりくる。

試しに鞆を付けたまま一振してみる。ブンと、大きな音を立てて、刀が動く。重たいので、反動でこけそうになっただが。

倉庫を出ると月詠様が刀を振っていた。

何とも綺麗な太刀筋で、素人の俺でも綺麗だとわかる。流れるように繰り出される剣

技。さすが神様、とんでもない早さの剣速だ。

そんな圧倒的な剣術に見惚れていると、月詠様がこちらに気付き、一瞬で俺の目の前にくる。

「わっ」

「おっと、すまないね。」

びつくりした、いきなり目の前に来られる物だからせつかく選んだ刀を、落としてしまふところだった。

「それが、レイの選んだものかい？」

「はい。」

持ってきた刀を月詠様に渡す。その刀を鞘から出すと、真っ黒い鞘とは対象的に白い刀身が姿を現す。先から根元まで真っ白だ。曇り一つもなく、美しい刀身。

「ふむ、良いものを選ばれたね。」

「選ばれたとは？」

なんで選ばれたという表現をしたのか？良く解らなかつた。

「刀とかの道具たちにはね、意志があるんだよ。特に刀とかの刃物には強い意志があるんだ。だから、『選ばれる』って言ったんだ。」

意志となると、付喪神とかそう言うものの類いかな。そんな風に納得していると、

「たまに、人の姿になるものもいるけどね」

「まじですか……………」

もうなんでもアリだなこの世界。神だったり、月人だったり、瞬間移動だったり。うん、もう気にしてはいけない。うん。

「とりあえず戻ろうか、もうお昼だしね」

「わかりました」

月詠様が急に立ち止まってレイの方をむいて、

「あ、これ渡しておくね」

そう言って、あの充電の無かったスマホを渡してくる。ためしに電源をつけてみると、付いた。しかも、100%である。

「レイにはまだ力の移動は出来ないのに、それ渡してごめんね。」

「え？それはどういう……………」

「ああ、力というのはどんな生物にもある力だよ。」

うん、会話が成り立っていない。

そのあと、食堂みたいなところに着くまで『力』と言うものを説明してくれた。

なんでも、その『力』というのは生物には必ずと言っていいほど誰でも持っているらしい。月詠様は神力、月人たちは靈力。

俺みたいな玉兔は妖力と言うものをもっている。

他にも魔力とか呪力などがあり、まだまだ有るかもしれないらしく、詳しくはわからないそうだ。

昼食を食べ終わったあと、また道場に戻ってきて俺の力、妖力の出し方を練習した。案外簡単で、その日の夜までにはスマホを充電できるようになった。電気じゃないけど………

出し方としては、ぐっと力を入れると体の中に流れのようなものができるから、それを頭の中でそれを操る感じだ。

ちなみに、出てきた料理はカレーだった。スパイスがきいていて、おいしかった。そして、当然のごとく置いてあったのが桃であった。

明日から本格的に訓練をやるそうだ。刀振ったり、妖力の扱い方を練習したり、刀の

方は不安しかないが、大学に受かったときみたいに頑張ればなんとかなる気がする。

序章・第六話

「あああああああああ
!!!!」

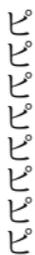
迫りくる斬撃を全身に妖力をまとわせ身体を強化し避けるか、昨日選んだ刀、『望月』に妖力を込めて斬撃を流す。四方八方から飛んでくる斬撃は、俺に休む暇を与えてくれない。それどころか息もする暇すらも与えてくれないほど激しい攻撃。もういじめである。これ。

ちなみに、妖力の纏わせ方はスマホを充電した時と似たようなもので、身体から出る妖力の流れを全身に移動させることで身体能力を強化することができる。これにより、あの重たい刀を軽々と持ち上げられるようになった。

振ったりするのはかなり反動が来てしまうけれど。

それで何をしているかと言うと、月読様との特訓だ。いきなり始まったのだが、なんでも始まったんだったか。

たしか……………



「あふ……………」

スマホのタイマーが鳴り目を覚ます。

昨日は寝坊してしまったので、一応早くタイマーを掛けていた。早く掛けておいて損はない。

体を起こしタイマーをとめる。

ベッドから降りて、朝食の準備を始めようと立ち上がりキッチンまで移動する。

キッチンはIH のようなものが二口付いていて、広い水回り。更には冷蔵庫や電子レンジ、食洗機まである。ありがたいことに、冷蔵庫には沢山の食材が詰まっっていて、調理器具も揃っている。

早速、IHを付けて鍋をあたためる。今日は月詠様に早くきて欲しいと言われているので簡単に卵焼きにご飯、そして味噌があつたので味噌汁を作ろうと思う。

……
前世がこんな生活リズムだったからか、体にこれがしみついてしまっているなあ

朝食を食べ終わり、台所まで行き食器を洗う。洗い終わり、部屋に置かれている時計を見る。

……まだ6時30分だ。

月詠様との訓練の時間は8時30分から。つまりは時間が余ったということ。

なにしようか。

早く起きすぎたことを後悔する。

だがしかし、時間は戻らない。今さら後悔しても無駄なのだ。さて、この余った時間をどうするか。

特にすることはないので、早めに道場に行くとしよう。

と、言ってこのざまである。

「あああああああああ
!!!!」

なんで俺は早く起きすぎてしまったんだ。

くっ誰が何のために！なんで朝の5時なんかタイマーをセットしやがった！

だか、タイマーをセットしたのは紛れもなく、俺だ。自らを恨んでもしかたがない。前世でも早く起きすぎて面倒ごとに巻き込まれることはよくあったのだ。全く学習していない。

ところで、俺は良く月詠様の攻撃を受けていると思う。前世ではこんなことやつたことなかったのに後ろから来る攻撃も避けられている。それに何時間もやっているが、疲れというものがあまりない。今さらなのだが人間を止めたのを自覚してしまっている。

しかしだ、いくら人間を止めたと言っても、こちらは元々だだの人間だ。鍛えるのは必要だとは思うが、いくらなんでも、いきなり刀を持って数日の元一般人には早すぎではないだろうか。

そんなことを考えていると、余計なことを考えていたのがわかったかのように攻撃が強くなる。瞬く間に斬撃に囲まれてしまった。

「あつちよ」

元一般ピーポーには避ける術は無く、斬撃は全部命中し、身体中から感じる衝撃にやられ、俺は意識を失った。

○

「おや、やりすぎてしまったかな？」

レイに近付いて様子をみる。レイは目を閉じていて、身体に力が入っていない。どうやら気絶しているようだ。

いくら妖力で身体能力を強化していたといえど、私の力で成長させたといえど、中身

はただの人間。調子に乗って、少しやりすぎてしまった。斬撃を飛ばしすぎたかな？

ちなみに、私が攻撃に使うのは主に『弾幕』と呼ばれるもので、神力や妖力、霊力などを丸型などの形に作り相手に目掛けて撃つものだ。私は刀から斬撃を模した弾幕を使っている。

今さつき使ったものは衝撃が加わるだけの弾幕で怪我をすることはない。本当に殺しに掛かるなら斬ることが出来るものを出すこともできる。

今回は早さも威力もある程度下げて撃ったのだが、それでも、月製のレーザー銃位の威力はある。が、レイはその大半を避けるか刀で流すかをしていた。

これには心底驚いた。レーザー銃の性能は月人たちが『地上に派遣される月の使者の仕事が楽になるように』と、私と月の都の技術部が丹精込めて作ったものでその性能には目を見張るものだ。

それに後ろから来ていた攻撃も、軽々と避けていた。もしかしたら、レイの前世は武

芸者とか、そう言う類いのものだったのか？いや違う。刀を渡した時には私が刀の持ち方を教えたぐらいだ。絶対に違う。

となるとやはり能力だろうか。レイの能力が玉兔の固有の能力『波長を操る程度の能力』であつて私の攻撃を瞬時に察したのだろうか。そうであれば、おそらくだが、無意識に使っている可能性が高い。

これは鍛えがいがある。レイは気絶してしまつたし、特訓は明日からだね。

楽しみだよ。

「んん……………」

あれ、なんで俺はベッドで寝ているんだ？

まさか、また寝坊!?

いやいや俺は早くタイマーを掛けて起きた。それで道場まで行って、それで……………

『あああああああああ!』

自らの叫びが頭の中に響く。それにより全てを思いだし、

「あああああああああ!」

また叫んだ。

「ふう」

とりあえず落ち着いて、スマホを見る。

午後の10時。

気絶したのが確か午前中の11時ぐらいだったから、かなり長い間寝ていたようだ。ベッドで眠っているのはたぶん月詠様が寝かせてくれたのだろう。

……月詠様が気絶させたのだけれど。

明日もあるのだろうか、特訓。

がしかし、サボるわけにもいかない。月詠様のご厚意でやつてもらっているのにサボるというのは、俺の良心が許さない。それに刀を武器にして振り回すのも、そこは日本男子。ロマンがある。

そんなことを考えながら、懲りずに朝の5時にタイマーを掛け、気持ち良すぎる魔のベッドに身を任せて眠る。

「やあ。依姫」

次の日に今日以上の地獄が待っているとも知らずに

序章・第七話

私の名前は綿月依姫。月を様々な脅威から守ったり、色々なところに派遣されたりする『月の使者』の任についている。脅威という脅威はこれと言ってないのだけれど、一応ある部隊と言ったものなので、実質暇なのだ。

そんなところに所属しているので暇を持て余して、いるはずもない侵入者を見つけるために月読様の屋敷を巡回している。この前、一匹の玉兔が迷い込んでいたときは『やつと、それらしい仕事ができる………!!!』と思い突発的に行動してしまったせいでお姉さまに怒られてしまった。あの玉兔にもしつかり謝罪ができていないので会えたらいいのだけれど、生憎だけれどまだ会えていない。ちなみに、月の使者たちは月の神、月読様が遣わす部隊であるためかなり強い。

今日は月詠様に何故か分からないが部屋にお呼ばれしている。呼ばれる心当たりは……あるけれど。

例の玉兔のことだろう。あの時の私の行動を悔やむ。なんで誰かいると思つて、いきなり斬りかかるなんてことをしてしまったのか。

あの玉兔が止めてくれて良かったと思う。しかし、あの玉兔が私の攻撃を身体を動かさずに止めたときは驚いた。しかもその止まり方が不自然で、空中にピツタツと止まったのだ。謝つた後でどうやって止めたのかを教えて貰うのが実は言うにあの玉兔に会いたいという本当の理由だ。

なにか『波長を操る程度の能力』以外の能力を持つていると考えていいだろう。だとしたらどんな能力だろうか。まあ、会つたときに本人から聞けばいい。

そんな風に考えていると、もう月詠様の部屋の前に来てしまった。そういえば月詠様の部屋に入るのは初めてだ。月詠様に呼ばれない限りは中に入ることはない。それに、私は月詠様に何か用事があつてよばれたことがない。

もちろん月詠様と仲が悪いとか、会つたことが無いとかそう言うことではない。恐

縮だが、むしろ仲は良いと言つてもいいだろう。道場で素振りをしていると向こうから話しかけて来てくれる。それに、刀の振り方についてもアドバイスしてくれる。だから決して中が悪いというわけではないが。

しかし、私の師匠でも滅多に入つたことがないといつていたのでかなり緊張している。それに加えて自分が悪いことをしてしまった心当たりがあるので余計に緊張してしまう。が、呼ばれている以上行かないわけにわけにはいかない。

覚悟を決めてとてつもなく大きい月読様の部屋のドアに付いているカードリーダーにカードをかざす。

ウーン

ピツと音がして扉が開く。『開いたんだこれ…』と思ひながら中に入るとそこには、

かごの中に大量に入っている桃を貪る姉と、優雅に緑茶をすする月読様がいた。

「ええ!？」

驚きのあまり声を漏らしてしまった。そりやそうだろう。いないと思っていた姉がいたというものもあるが、それよりも月のトップである月読様の目の前で堂々と桃を貪る姉がいたのだから驚くしかない。

どうしてそんな堂々と月詠様の目の前で、桃を食べられるのだろうか。普通は緊張するはずだろう。いくら考えてもなんでかがわからない。それに、桃を食べるのに夢中になって私が来たことにきずいていない。

そんな風はこの状況（主にお姉様）に困惑していると、

「やあ依姫、よく来たね。まあ座りなよ。」

そう言つて月詠様が二人が座っている丸型のテーブルの椅子を引く。

「は、はい。」

とりあえず、月詠様が引いてくれた椅子に座る。私の姉であり私と同じ『月の使者』でもある綿月豊姫はまだこちらに気付かない。桃の山のせいはこちらからは全くと言つていいほど見えない。が、幸せそうな顔を浮かべているのが、めに浮かぶ。

そんな桃中毒のお姉様はほつといて、月詠様に聞きたいことを話す。まあ、なんでお姉様までいるのかも聞きたいのだが、それよりも先になんて呼ばれたかが聞きたい。例

の玉兔の件だろうか。もしくはほかのことか。

「それで、ご要件は何でしょうか。」

どちらにせよ、いままで一度もよばれたことがないのに今日呼ばれたのには何か特別な理由があるはずだ。

「いやー実はね、ある玉兔を訓練しているのだけれど……………」

「ええ!？」

「……………どうしたんだい？」

「へ、あ。す、すみません。失礼しました。」

「そうかい？」

私はなんで大声を出してしまったのか。頭の中で項垂れつる。頭で考えるより先に体が動いてしまうという私の悪い癖が出てしまった。そのせいで月読様を驚かせてしまった。申し訳ない。そんな妹の危機に全く気付かず桃を食べ続ける姉とはこれいかに。もうお姉様には桃禁止令を出してやろうか。

それで、月読様が1匹の玉兔を訓練しているらしい。……………なにそれ羨ましい。こう思うのには訳がある。昔、月読様にお手合わせ頂いた事があった。結果は惨敗だった。その時結構自分の剣術には少なからず、自信があつたので、負けたときはかなり悔しかった。

その時から、月読様の剣術に少しでも近づこうと指導してほしいと何度か頼んでみたのだが、いつも返事は否。理由は『私から教えられることはもうない。』の一点張りで、結局、教えてもらったり、手合わせをしてもらったりしたことがない。故に羨ましいと思ってしまう。

それにしても玉兔か……………

ん？玉兔？

「……………」

「どうかしたかい？」

嫌な予感が頭をよぎる。もしかして、私が切りつけかけた玉兔って……………

月読様の訓練している玉兔!?

いやいや、まだそうと決まったわけじゃない。もしかしたら私が切りつけかけた玉兔じゃないかもしれない。その希望にかけてあの玉兔の特徴を思い出す。たしか左右の目の色が違っていた。色は赤と青だった気がする。

「もしかして、その玉兔の目って左右違っていましたか？」

望みをかけて聞いてみる。が、帰ってきたのは……………

「うん、そうだよ。」

肯定の意であった。つまり、私が月読様の訓練している玉兔を攻撃したことが確定してしまった。

「……………その玉兔を侵入者だと思って、攻撃してしまいました。」

「ははははははは!!!!」

「え？」

二人が笑って来る。いつの間にか大量にあつた桃が籠ごと消えていて、満足した顔でお姉様がこちらを見てニヤニヤしていた。桃はおそらくだかお姉様の能力『海と山を繋

ぐ程度の能力』で移動させたのだろう。この能力は実際に海と山を繋ぐわけではなく、海と山を繋ぐことも出来るということを表している。つまり、大体のものは繋ぐことが出来るのだ。さっきのは桃の山と、お姉様の部屋につないだのだろう。

それよりもなんで二人が笑っているのかわからない。私は笑われるようなことをしたのだろうか？断じてない。私は笑われることではなく、一匹の玉兔を攻撃してしまったのだ。しかも、月読様の鍛えている玉兔を。むしろ、怒られるべきではないか？いくら考えても私が笑われるようなことはしていない。なので、率直に聞いてみた。

「なんで、私は笑われているんですか？」

「あら、わからないかしら？」

お姉さまが答える。いや、そう言われてもわからないものは分からない。

「いや実はね……………」

序章・第八話

私は綿月豊姫。ここ、月の都を守る『月の使者』をやっている。家の妹に誘われて入ったのだか、月面の裏の裏にある月の都に誰か来るわけもないのでかなり暇。

やることと言えば、配下の玉兔たちを鍛えたり、妹の依姫と鍛練したり。後は桃を食べることだろう。月の桃は大体は私が育てているせいとか、私の名前をもじってよく『桃姫』と呼ばれることがある。私自身も桃が好きなのでこのあだ名は密かに気に入っていたりする。

ちなみに配下の玉兔と言うのは、『月の使者』の配下の玉兔でイーグルラビィから選ばれる。いわばエリート玉兔と言ったところだろう。私たちから選ばれるか、ある一定以上の實力を持っているかで選ばれるが、基本的に私たちが選んでいる。

鍛えると言っても何か教えるわけでも無く、ただ手合わせをするだけだ。まあ、玉兔

が良く使う武器がレーザー銃なので、刀を使う依姫と扇を使う私では教えることがないだけだ。

そんな暇な生活の中にある面白いことが起きた。月のトップである月詠様に呼ばれたのだ。月詠様に呼ばれること自体は初めてではない。しかし、私単独で呼ばれたことが無かったのでかなり興奮している。

用事は月詠様の部屋に着いたら教えると言われていて、部屋に着くまでにどんな用事を考えてみる。最近私の近くで起こった出来事と言えば、依姫がある一匹の玉兔に斬り付けかけたということぐらいか。イーグルラビイのことや、私が育てる桃のことに何か言われたことはないのでおそらくだか、あの玉兔の件だろう。

それにしてもあの時は驚いた。いきなりいつも冷静なわが妹が屋敷にいた玉兔に斬りかかるなんて。侵入者かどうかはまず確認からと教えたことがあるがいくら経つても頭よりも身体が動いてしまうあの癖はなかなか治らない。

まあ、それが依姫のかわいいところなのだが。あの時、冷静にその場を治めたが正直

言うとかなりヒヤヒヤした。あの玉兔が攻撃を止めていてなかったらどうなったことやら。どうやって止めたかは分からないが、何かしらの能力を使ったことは明らか。

だけれど、能力持ちはこの月では珍しくない。妹の依姫は『神霊を呼ぶ程度の能力』私には『海と山を繋ぐ程度の能力』と能力を持っている。だからだだの玉兔が能力を持っていてもおかしくないというわけだ。さて、そんなことを考えていると月詠様の部屋の前に着いた。

バカみたいに大きな扉を開ける。

ウーーン

やつぱりこの扉、大きすぎではないだろうか。何度かこの扉が開くところを見てきているのだからやつぱり慣れない。この大ききの扉は月の都にもこれ一つしかない。上層部が月詠様にと作ったらしいが、これは逆に迷惑ではないだろうか。

ここまで大きいと動かすのにもかなりの電力を食う。強度も凄そうだが。ちなみに下のほうに小さなドアがあるが、それを知っているのは私と師匠だけ。わざわざこの扉を『開けるのめんどくさい。』と言って月詠様が扉に穴を開けたのを今も覚えている。しかも拳で。

○

月詠様の前に出て、跪く。

「失礼します月詠様。今日はどういったご用件でしょうか。」

「やあ、豊姫。まあ座りなよ。」

「では、失礼します。」

座るよう促されて、月詠様の向かい側に座る。月詠様の部屋は特にめっちゃめっちゃ派手と言うわけではなく比較的シンプルで、例のバカデカイ扉を作った上層部とは違い質素だ。だけれど、一応は月のトップなので奥に豪華な部屋があるが、使っているのを見たことがない。一度入いらせて貰ったことがあるが、なんか倉庫と化していた。

「それで、ご用件とは何でしょうか。」

とにかくそんなことより私単独に用事とは、何かしらの理由があるのだろう。月詠様はむやみに人を使ったり、呼んだりしない。いつも何かしらの理由がある。いままでも

そうだったので呼ばれることに抵抗はないが、なぜ私一人なのかは気になるところだ。

「……………依姫がある玉兎に攻撃した件だけだ。」

その一言に背筋が凍る。薄々気が付いてはいたが、あの玉兎は月詠様の何かなのであろう。月詠様の屋敷の中に普通の格好でいること自体がおかしい。それから気付くべきだったのに、私は全く持つて未熟だ。しかし、今は自分の未熟さに浸っている場合ではない。

「申し訳ありませんでした。私がつと早く気づき、依姫を止められていたら……………」

私が依姫を庇ってあげなくてはならない。そもそも私が早く気付いていれば依姫はあの玉兎を攻撃することはなかったのだ。私が月詠様の言葉を待つ。数秒後月詠様から発せられたのは怒りの言葉でも、戒めの言葉でもなく、

「どうだった？」

一つの質問だった。何がどうだったなのか、言われた瞬間は分からなかった。今さっきまで咎める言葉を予想していたからか少し答えるのが遅れる。だか、こちらも伊達に何億年も生きていない。直ぐ様理解する。

「例の玉兔と依姫の刀を止めたことでしょうか。」

が、一応確認として月詠様に聞く。

「へえ、依姫の刀を……………」

月詠様が相槌をうち、頷く。どうやら合っていたようだ。しかし、なぜそんな質問をしたのかはわからない。続けて聞いてみる。

「なぜ、そのような質問を？」

「いや、その玉兔の能力が私ではわからなくてね。それで、君たちに合わせてみたという訳だよ。」

と、なると……………

「月詠様がこれを仕掛けたんですか……………」

それに対して、月詠様は頷く。確かにおかしいと思ったのだ、見た目は子供の玉兔なのに通行証も持っているし。まあ、でも良かった。本当にこれが月詠様の起こした物ではなく、事故だったとしたら依姫がいくら『月の使者』だからと言っても、一月人。上層部に目を付けられ裁かれていたかもしれないので本当に良かった。

「良かった……………」

「おや、まだ安心するのは早いよ。」

「えっ!」

月詠様の言葉に驚く。どういうことだろうか、今回の件は月詠様の起こしたことであつて、依姫が罰せられるものではないはず。なのに……………

「そんなに警戒しなくてもいいよ、ここの為に尽くしてくれている君たちを罰するつもりはないさ。」

じゃあどういうことだろうか？罰しないのなら何を……………

「依姫にお仕置きを頼めるかな。」

真顔で言ってくる月詠様。これには私は喜んで答えるしかない。

「喜んで。」



「と、言うわけだよ。」

いままでの流れを聞いて私の顔に穴が開いてしまいそうな程、とんでもない形相で睨んでくる依姫。そして、左手を刀にあて今にも刀を引き抜き切りかかって来そうな体勢でこちらを向いている。

「まあまあ、いいじゃないか。小さいときに良くされていたし、今さらだろう?」

「それがっ! いやっ! なんです!」

月詠様に弄られ、顔をさらに真っ赤にして怒る依姫。怒ると言ってもそこにある感情は怒りよりも恥ずかしいの方が大きいだろう。それを見ていると、やっぱりいくら生きても我が妹はかわいい。それだけは変わらないだろう。これから先ずつと。

「……お……姉……様？お姉様！聞いてますか？」

「あら、ごめんなさい少しブーツとしてたわ。それで、なにかしら？」

「どうやら話を聞いてい無かったことがばれてしまったみたいだ。先ほど月詠様の部屋を出て、自分たちの部屋に戻っているところ。」

「もう！すっかり聞いていて下さいね？それで、あの玉兔にはどこにいけば会えると思いますか？」

「惚れたのかしら？」

「違います！この前のことをちゃんと謝れていないので。」

「かなり先になると思うけれど、いずれ手合わせするでしょう？その時に謝ればいいじゃない。」

「それじゃあ遅いですよ。」

手合わせと言うのは、月詠様からのお願いだ。なんでも、『彼がある程度の実力を身に着けたら手合わせしてほしい。』とのことだ。月詠様のことだからかなり鍛えてくるので、かなり先になると言ったのはその為だ。まあ、玉兔が強くなる幅なんてたかが知れているけれど。だけれど依姫の攻撃を止めたのだ、きつと楽しませてくれるだろう。

「お姉様！聞いていますか！」

「あら、ごめんなさい聞いていなかったわ。」

「ちゃんと聞いていてください！」

本当に。

序章・第九話

「ふっー！」

前、後ろ、上、横、四方八方。至るところから斬撃がとんでくる。いつもと同じように刀と身体に妖力を纏わせ、それをしっかり空中で刀に当てて弾く。簡単に弾け、どこかにとんでいく。飛んでいった『弾幕』は壁にあたり光を出しながら消えていった。

俺の能力を使い、回りの『弾幕』を感じる。感じるとはどこぞの『見るんじゃない？ 感じる！』等とほざく熱血教師がいいそうなその感じるではなく、実際に感じているのだ。俺の能力は『波長を操る程度の能力』と言われるもので玉兎共通の能力だそうだ。

これで飛んでくる『弾幕』の位置を特定し、刀で捌く。要はレーダーみたいなものだ。自分から波長を飛ばしその帰ってきた波長から距離、位置を特定する。ちなみに向こう

からも空気の振動という一つの波長、要は音も感じることができ、自分から波長を出すより簡単に位置を特定することができる。ちよつとラグはあるけれど。

相手の攻撃の波長を感じることができれば、自分から波長を出すことはないのではないかと疑問に思い、月詠様に聞いてみた。すると、『波長を出す攻撃を常にしてくる相手とは限らないからね。』と帰ってきた。まじで？と思つてしまった。波長を出さないつてことは曰く気配がないのだとか何だとか。

そんなことよりも、なんでこの能力が使えるようになったかと言うと、使えるようにならされたという表現があつていふと思う。初めて月詠様と手合わせした次の日にいきなり『レイには玉兎の基本の能力の使い方を覚えて貰うよ。』と清々しい顔で言われた後、目隠しをかなり強く結ばれ、それを付けたまま前日と同じことをやらされた。

あの時は泣きそうになつてしまった。だつてそうだろう。目の前真っ暗、どこからか飛んでくる『弾幕』。もう恐怖でしかない。その時、最初から無意識にだが俺は能力を使つていたらしくある程度は避けることができたが、結局すべては避けきれずに気絶してベッドの中だった。あの時の月詠様の顔は今でも思い出すとぞつとする。その訓練

のおかげで能力の使い方はもちろん、空も飛べるようになった。

最初空を飛ぶことを教えてもらった時、ワイヤーとかを付けずに宙に浮く月読様を見て『物理法則無視してないか?』という風に思ったが、前世とは全く違う世界なのだからと自らを暗示して月読様の言う通りにやってみたら簡単にできた。タケコプターもこんな感じなのだろうか?

ほかにもできるようになったものがある。『弾幕』を撃つことが出来るようになった。『弾幕』はいわば力の塊で、俺は妖力を適当な形にしてできた玉をぶん投げるくらいしかできないが。

月読様の『弾幕』は人を気絶させるぐらい強力な攻撃なのだが、道場の壁に当たっても壁を傷つけることなく『弾幕』は消えてしまう。この道場の壁はこういう物かは詳しくは分からないが、ある結果が張っていて、月詠様いわく道場の壁はある程度の衝撃が加わらないと壊れないというもので、月読様も本気でやらないと割れないらしい。

さて、月の世界のワケわからないものと月読様の鬼訓練よりも考えなくてはならない

ことがある。なんでも俺が転生をしてもう100年が経ったらしい。え？二桁多くないって？いやいや、合っているんだなこれが。別になにかタイマーで測っていたとかカレンダーを見て確認したとかさう言う訳ではない。今さっき『いやー、時が経つのは早いね。』と月詠様が急に言い出すので気になって、『何がですか？』と率直に聞いて見ると『レイがここに来てちようど100年なんだよ。』と言われ、かなり驚いてしまった。だって100年って普通の人間は寿命で死ぬ。まあ、今人間じゃなくて兔なんだけけれど。100年という年月を生きていることに驚きはない。だっているもん近くに、億歳越えがいるもん。

俺にとつてはここに転生してまだ10年位の感覚で、100年も経っていたことの方が驚きだ。それに兔の寿命だって、本来であればとつくに死んでいるはずだ。今さらだけどやっぱり俺の前世とはまったく違う世界なのだと、再び思い知らされる。おっと目から汗が。

そんなことよりも……

いろんなところから飛んで来る『弾幕』を捌くことに集中しないと当たってしまう！

『弾幕』に当たってしまうとかなり痛いのだ。当たってしまうと何かに殴られたように衝撃が走る。昔はまともに受けることができなかったし、妖力による防御はお粗末なものであったために毎回毎回訓練が終わったころにはベッドの中だった。あの時みたいになるのはごめんだ。

○

「ありがとうございます。」

無事弾幕に当たることなく訓練を終えることができた。いつも当たりそうになってしまうので、ちよつとでも気を抜いてしまうとすぐさまベッド行きだ。まあ、最近はそのういうことはないのだけれど。

訓練が終わるタイミングはいつもランダムで1時間の時もあれば、5時間というところでもない長さになってしまう時もある。短いときは普通に避ける事ができるが、長い時間避け続ける時には波長を出すのを途切れさせてしまう時があり、数発くらってしまふ。やつぱり、まだまだ未熟だ。能力を使えるようになったり、空を飛べるようになった

たりしてもできないことがある。そういうのは、かなり悔しい。

ちなみに訓練の内容としては、まず午前中に刀の素振り1000回。そのあと道場内を100周して、休憩でお昼ご飯を食べる。食べ終わると今度は実践訓練で弾幕回避や剣術の手合わせをして訓練は終了。最初聞いたときはかなりきついと思ったが、妖力で身体強化をしていると案外簡単だった。実践訓練は強化しててもつらいけれど。

さて、今日の訓練は終了したのであとは部屋に戻って夕飯の準備をしましょう。あと、刀の手入れもね。少しでも手入れをおこたつてしまうと、刀はすぐに錆びてしまうので気を付けなければならぬ。月読様も1度だけ錆びさせたことがあるらしく、念を押して言われた。

そういえば、冷蔵庫の中には何があったかな？人參は昨日の残りがあって、魚もいくつかあったな。今更だけれど、献立を考えるのが楽しみになってしまっている。大学に入っているときも弁当は作っていた。あの時はたまたま寝坊して弁当を作ることが出来なくて、良く寄るコンビニに買いに行つて、それでトラックに轢かれるとは思わなかったなあ……今世では寝坊には気を付けようと思う。まあ、なるべく……

とりあえずは部屋に戻ろう。まさかの100年以上も住んでいるとは思ってもよらなかった。100年たつても、俺が来たときと全く変わらず、劣化していないように見える。これが月の科学だ。何度も月の科学力に驚かされてもう大分慣れたのだけれど。そんなマイホームに戻るとしよう。

「では、失礼します。」

一礼をして道場を出る。さあて、夕飯は何にしようかな。



レイが強くなっている。この100年間見てきてここ最近かなり成長してきている。ちよつと前までは私の弾幕を受けて吹っ飛んでいたのに、今では打ち消すことはできないみたいだがはじけるようになってきた。今の弾幕は以前のとは違って威力を高めて撃っているのに弾かれる。

最初の頃は刀もろくに持てなかつたのに、今では私に負けないぐらい早く振れるよう

になっている。まだまだ負ける気はないが。目隠しだって、あれは『波長で相手の場所わかるかな。』なんて言う思い付きでやったのに悠々とやっているすがたを見ると私もすごいと思ってしまう。

私は目隠ししながらなんて出来ない。『神眼』を使えば何とかなるかもしれないが、それでも少しやりづらいと思う。妖力の量も増えてきているので術の扱いを覚えてもらったらいいかな。努力がすごいからねレイは。言われてないのに素振りしたり、道場内を走ったりしている。

このままいくと、依姫や豊姫と戦ってもらうのが少し早くなりそうだね。

序章・第十話

「ふう」

刀の手入れを終わらせ、置いてあったお茶で一息つく。お茶は基本的に緑茶をよく飲む。たまに気分で紅茶を飲んだりしているが、やっぱりお茶は緑茶だろう。まあ、紅茶は紅茶でおいしいのだけれど。

刀の手入れは今でこそ普通にできるが、初めのほうはよく膝の上から刀身を落とすようになったり、指を切ってしまったり、刀に塗る油をつけすぎて鞘の中が油だらけになったりと散々だった。あの時は出来る気がしなかったけれど、100年もたつと出来るようになるのだなあと時間の流れの偉大さを実感する。

さて、時の流れを感じるのもこれくらいにしないと寝るのが遅くなってしまう。だつてまだ作ってないもん、晩御飯。刀を鞘の中に入れ、キッチンへと向かう。今日は少し

時間もないのでサクツと作ってしまおうと思ひ、いつも通りの味噌汁と、弁当用に作りすぎてしまったポテトサラダとご飯でいいかな。

味噌汁を作るために鍋に火を入れ、米を炊くために磨いでから炊飯器に入れスイッチを押す。月の科学により米をたった3分で炊きあげさせるといふとんでも性能の炊飯器のおかげで調理時間の短縮が出来るようになってゐる。

最初使つたときは何もすることがなく、5分位待てば料理が出来てしまうということがよくあつた。材料だけ入れたらできるので、最初は『便利だなー』なんて思ひながら使つていたが、結局自分で作るようになった。何故かというと、前世で母親がほとんどご飯を作つていたが大学に入学したとたんに『今度からは自分でご飯を作りなさい』と言われた。俺は反論したが受け入れてもらえず、渋々自分でやり始めたのだが、案の定全くできず大変な思ひをしたからだ。もう、あんな思ひはしたくない。

朝ごはんを作る時間がなく、午前の講義で死んでいたのはいい？思ひ出だ。

ピピッピピッ



あ、
米が炊けたみたいだ。

「ああ、暇だなあ」

訓練中の玉兎たちを見ながらそんなことを呟く。もちろんの事ながら玉兎たちに聞こえないように小さく。まあ、どちらにせよこの距離からでは聞こえないだろう。私とお姉様が訓練をしている玉兎たちは月詠様から高い評価を得ている事もあり、通常よりも少し厳しい訓練をしている。

内容としてはまず午前中のうちにイーグルラビイの運動場を10周と妖力射撃訓練をして、昼食を取る。その後には私とお姉様との実践訓練。通常のイーグルラビイの訓練が射撃訓練だけと考えるとかなり厳しいかと思う。

月詠様から高い評価を得ていると言っても私たちはなにか教えることなどほとんどなく、手合わせしたり、サボらないか見ているだけ。実践訓練も、私からすれば玉兎たちの撃つ弾幕なんて目を閉じていても避けられるほど遅いし、威力もない。そんなだから私にとってはまるで訓練にならないのでかなり退屈になってしまった。

なってしまったというのも何故だか分からないけれど、急にいつもの日々が退屈に感じ始めている。今日だって朝起きて、玉兔の訓練の様子を見ていたり、お姉様と話したりと以前も同じような生活リズムだったのに、『暇』を感じてしまう。

実際にこの生活が暇なのだろうか？……いや違う。私はお姉様と会話したり、出来の悪い玉兔たちを見たりすることも楽しいと思っているし、満足している。だから、日常生活がいけないという訳ではない。そういえば、こんなことを思うようになったのはいつからだだろうか？確か、お姉様に呼ばれていじられたあの日より前。私が玉兔に攻撃してしまった時からだと思う。

百年ほど前の話でも、千年前の話でも、万年億年より昔の話でも、大体私は覚えていてる。覚えている理由としてはただ、それらを忘れてしまうような物事がなかった、ということだと思う。要は何か私たちが過ごす日常の枠を出た物事、忘れてしまうような大きなことがなかったのだ。

人が一つの物事を覚えている時間には限界があると師匠に習ったことがある。基本

的に人間や妖怪の脳には情報を記録するメモリのようなものが頭の中にあり、それが我々の記憶になっていて、その限界には個人差があるとのことだ。物事を忘れるためにはそのメモリを上書きしないと消えないらしい。他にも成長や老衰、長い時間がたつなどで忘れるらしいが、特に変化のない生活の上に私は月人であるため寿命がなく、体がほとんど変化しない。だから記憶を忘れることがない。

そのせいで、かなり昔のことを覚えていたりするのだが。

いま私が暇を感じているのは新しい、メモリに上書きのできるものが入ってきたにも関わらず、いまだ触れることの出来ないことから出た虚無感からの『暇』であろう。

あの玉兎に攻撃を止められたことを思い出すと、いつもやっている鍛錬にも心なしか力が入る気がする。月読様から手合わせのことを聞かされた時は内心すぐくうれしかった。私のリベンジよりも、あまり手合わせをしてくれない月読様に代わって相手になつてくれればいいなという喜びのほうが大きかった気がする。それに、扱う武器は刀！

上司の不気味な様はもはや恐怖である。



うーんなんか寒気がするな。何でだろう？風邪を引くわけないものなあ。

序章・第十一話

「んー」

起きたばかりで硬くなっている体をほぐす。ところどころ伸ばしたところからバキバキという音が聞こえる。体をほぐすとなるこの音、実は鳴らすと神経を傷つけて、神経麻痺や下半身不随等になってしまうかもしれないのであまりやらないほうがいいのだが、普通に気持ちが良いので悪いとわかっていてもやってしまう。まあ、やっても体は人間より頑丈な妖怪なので、そうはならないけれど。

今はいつも通りに道場に向かっているところ。俺の部屋から道場までの時間は、大体2、30分で着くぐらいだ。距離は測ったことはない。

その道中には何も無いというかなんというか、見ることができない。俺が今、周りの

状況を確認するためには、俺の能力である『波長を操る程度の能力』を使うしかない。まあ、要は生命にとって大切な五感の一つ、視覚が使うことが出来ないのだ。

これは決して俺が失明したとかそういうわけではなく、月読様によるもの。訓練の環境として『波長』を使ったレーダーの訓練の延長で、日常生活の中でも能力を使って能力に慣れるという訓練だとか。元の魂が人間だから、俺の今使っている能力は本来であれば使えない。らしい。まあ、俺は無意識に使っていたらしいが。

俺の中にある能力というのは、『波長を操る程度の能力』で、その能力は元々月の兎、玉兎の能力であり、人間であった俺にはなかった能力。ゆえに、体に慣らすしかないということだ。無意識に使うことが出来ていたとしても、故意に扱うことはむずかしいからだそうだ。

そもそも波長というのはレーダーだけに使うようなものではないと理解している。光の波長、音の波長、精神の波長など様々な波長が操れるらしいこの能力。だから、まだまだたくさん波長を操ることが出来るようになると思う。基本は通信の波長しか操れないと月読様は言っていたけれど。

ん？光の波長？あ、これ使えば回りが見えるようになるかも。今度やってみよう。

ちなみに、今俺が使うことができる能力は、通信機器との通信、波長によるレーダー、と言ったところだ。スマホとかとの通信は周波数を合わせることによって通信は可能だったが、実用性はあまりないと思う。

理由としては、単純に周波数を合わせるのが難しく、合わせることには合わせられるが、結構時間がかかってしまう。面倒くさいと言うのもあるし、頭に直接かかって来るというのもなんだか気分が悪い。どうせ使うなら、自分の周波数を決めて使うのが良いと思う。まああまり、使いたくないけれど。



さて、そろそろ道場に近付いてきたと思うのだが、普段は聞こえないような音が聞こえてきた。

パ……ツ……ンツ

ど……やあ……!!せ……あ!!

いつもならば道場には誰もおらず、月詠様とのマンツーマン指導まで一人だ。しかし、今日は誰かいるのだろうか、中から何かがぶつかり合う音や、誰かが叫んでいるような音が聞こえる。まあ、聞こえると言つても俺が波長で感じるしかないほど小さい音ではあるが。音が小さいのは、まあ単純に道場が防音だからだろう。

それよりも何で今日は道場に人がいるのだろうか。昨日、月詠様からは何も言われていないので少し警戒して、中の状況を確認するため道場の入り口の隙間からレーダー用の波長を飛ばす。

『1, 2, 3……………498, 499, 500……………いや多!』

途中から数えるのがめんどくなくなってしまふほどの人数だ。よく500まで数えたな俺。なんで今日はこんなに人がいるのだろうか?いつもならば俺と月詠様の訓練にしか使わないのに、今では道場の中はかなりの人があふれかえっている。普通ならば熱気に包まれてもおおかしくないのだが、普段と同じような空気なのは流石月の科学といったところか。

そういえば、こんなに大勢の人を見るのは久しぶりだ。月の『都』というぐらいだから人が多いと思うだろう。まあ実質多い。月の人口は億は悠々と超えている。が、その中から月の神である月読様の屋敷に入ることが出来る者は少ない。

俺は家が月読様の屋敷の中で、訓練場も屋敷内。それに、あまり屋敷から出ないように月読様から言われているのもあり、未だに屋敷の中から都に出たことがない。まあ、仕方がないのだけれど。そんな理由で『都』に出ることはなく、大勢の人々を見ることになかっただけだと思う。

扉の隙間から中の様子を詳しく確認する。中にいる人たちは手に竹刀を持ち、相手のいない人に対して挑みあっている。そんな激しい鍛錬の中でも、剣道だけがをしないために使う防具類を、一切つけていない。そのせいか、道場の端には何人もの人が横たわり山を作っている。道場の真ん中ではガタイの良い男たちが竹刀を打ち合っていて、その勢いがすさまじく、一撃で周りにいた数人を吹き飛ばしてしまっている。

この状況から察するに、月の兵士たちが日々の鍛錬の成果を見せ合っているのだろう。こんな状況では俺は訓練をすることはできない。それに、鍛錬の邪魔をするのも悪

い。仕方がない、仕方がない。これは今日は無理だなあ。

………本音を言うと吹っ飛ばされて、道場の端の山の一部になるのはごめんである。

月読様に気づかれる前に、さっさとその場を去ろうとしたのだが、いつの間にか肩に何かに触れた感触があった。がその時、波長を感じることはなかった。俺はこの波長リーダーに引つかからない人……いや神か、を残念ながら一神しか知らない。

まあ、もちろんのことながら月読様である。

が、しかし、あのたくさんの月の民の中からすごい強い人がいて、その人が俺の肩を掴んだのかもしれないという一つの希望があった。とりあえずは振り向いてみればわかること、すぐさま波長を出し振り向く。

「おはよう、レイ。どこに行くのかな？」

振り向くとそこには満面の笑みでほほ笑む月読様と、後ろにいる先ほどまで中でうち合っていたのだろう。汗だくの人が二人、こちらを睨んできている。その事から俺は理解した。

俺はこれから吹っ飛ばされるのだなあ

序章・第十二話

「月詠様、この玉兔が例の……？」

「うん、そうそう。私が鍛えている玉兔だよ。」

さて、どうすればこの場から脱することが出来るだろう。追いかけて来ないので？
なんて考えが浮かんできたが、呼び止めたと言うことは俺に用があると言うことであり、逃げてでも追いかけて来る筈だ。

さて、状況を整理しよう。月詠様が目の前におり、ムキムキの人が二人。この方たちがだだの人間であれば、なんとも簡単に逃げることはできる筈だろう。しかし、残念ながら一人は月の神、後ろの二人は多分だけど月の民の兵士だろう。

月詠様はもちろんのこと、月の民の兵士がかなり強いのも知っている。が、面識があつたり、実際に見たわけではなく、月の兵士の構成からわかること。

月の軍事部隊は大きく分けて三つある。

一つ目はイーグルラビイと呼ばれる玉兎のみで構成される部隊で、玉兎のなかで上位の者から選ばれる。行う任務としては不足の事態が起きたとき月の民の兵士の下に付き、それに従うだけ。因みに一番数が多く、一番弱いらしい。

二つ目は月の使者。これは月の民の兵士と、イーグルラビイの中から選ばれる部隊だ。選ばれる基準は各部隊の中でかなりの上位にいる者たちで構成される。任務は至って簡単。月以外の場所から干渉、または攻め立てられた場合において、先陣をきる部隊だ。簡単といったのは、ただただ月の周りに認識を阻害する結果が張っており、来れないというよりは気付かないらしい。

最後の三つ目は月の民の兵士だ。この部隊は月の使者に上位の者たちは引き抜かれているが、総合的な戦力は各部隊の中で最も高いと言えるだろう。戦力が高いのは単純

な力、それだけだ。この部隊を構成する方々は、全て人妖大戦以前からいる者たちで、生業の軍人たち。それ故、数が少ない分とんでもない強さを誇るのだ。因みに、月詠様と同じく億歳は余裕で越えている。

任務は月の民の守護。だから、基本は月の都の中に居るらしい。

さて、そんな億歳越えが目の前に月詠様を合わせて二人。ここから逃げることは多分、というか絶対無理だろこれ……

単純な攻撃力だけならまだしも、スピードでも絶対に勝てるわけがない。これは月詠様で経験済み。以前、道場を100周を1時間以内で走りきったおかげで、走ることに関してはかなり自信がついたことがあった。

それに歓喜しているところに月詠様がきて喜びの余り、その事を話してしまった。すると、『じゃあ、私と勝負をしよう。』なんて言われて、頭に花が百花繚乱していた俺はそれを受けてしまい、さっきできたばかりの自信を木っ端微塵にされたから、嫌でも頭に残ってしまう。

ちなみに道場一周は大体フルマラソン（42.195km）位の距離で、それを100周、一時間以内に走りきったのだから自信がついてしまうのは仕方がないだろう。前世では足は余り早くなかったからなおさらだ。

さあ、そんな考察から目の前の三人から逃げられる方法は……
思い付くと思う？

「答えは当然ながら、否。
こんなの無理である。」



隣に月詠様がいて、後ろには先ほどの二人。結局道場内に連れていかれて、端の方で鍛練の様子を見ながら座っている。さつきから四方八方から視線を感じている。目隠しをしていて視界は無くとも、何となく解るのは、俺が出している『波長』のおかげだ。

その波長で最近は感情、つまり精神状態の波長がわかるようになってきた。具体的にはわからないけれど、ある程度は相手の感情が読み取れるようになった。今俺に対して向けられている感情も全部ではないけど、大体わかる。

感情の読み取りかたとしては、波長が短ければ短いほど怒っているとか、短気。逆に波長が長ければ長いほど温厚で落ち着いている。という基準を作って判断し、読み取っている。

たまに道場に行く道中で、何人かとすれ違うことがあり、そんな時にコツソリ波長を読み取らせてもらって、精神状態の波長を感じ取る。これを何回も繰り返し試したおかげで、大体の感情を読み取れるようになった。判断する基準が出来たのはこれのおかげだ。

それで精神の波長を読み取る以外にわかったのは、月の民は基本的に精神が温厚ということ。長い間生きていると温厚になるのだろうか？たまに少し短い人がいるけど、気にするほどじゃない。

「どう？打ち合っているの、見えるかい？」

月読様が話しかけてくる。が、いつもより波長が短く、話し声的にも心配してくれているのがわかる。

実は心配しているわけを俺は知っている。何でかというところ、この目隠しを付けるとき、かなり心配していたからだ。それに、自分で言っていたし、『ほんとに大丈夫かい？心配だよ……』って。

元は人間だと知っているからこそだと思う。もし、俺の前世でいきなり視界がなくなったら、大学に行ったり、友達と遊んだりできないのは勿論、生きることだつてままならないだろう。元々やっていたことが出来なくなる。だれだつてきついだろう。そんなこと人の手によって行うのだ。その苦しさをやらせてしまうからこそ、やる人がたとえ神でも心配してくれているのだと思う。

因みに俺が目隠しを付けたときあんまり不便にはならなかった。元からいつも波長は出し続けていたので、あまり変化がなかった。変わったことといえば色がなくなったことだろう。

「はい、とてもよく見えますよ。」

「それなら、彼らと打ち合いをしても大丈夫だね」

よく見えることを伝えたと、あの嵐の中の人たちと打ち合うことが決定した。まあ、予想通りだ。なんで予想通りかというところ、ここまで来て戦わないということがあるわけではないのだ。ここまでできて打ち合いを見るだけで終わる訳がないのだ。雰囲気だけを漂わせて終わるなんてあるわけがない。月読様の性格的にも。

こうなつたらとことんやるしかないだろう。ぼこぼこにされてもだ。それに、日々の鍛錬の成果を生かす時だ。むしろ都合がよい。どれだけ俺の月読様に鍛えられた剣術がどこまで通用するか試すいい機会だ。最終目標にもこれで近づくことが出来たらいいのだが。

序章・第十三話

『うーん』

近くで繰り広げられる竹と竹のぶつかり合う音を聴きながら頭のなかで、唸る。なん
で唸っているかというのと、戦うのはいいのだが、いったい誰とやるのだろうか？という疑
問。

さつき言われたばっかで全くルールとか、人数とかが全く分からない。何にも説明と
かをされないまま連れられているから、不安しかない。

いくらあげつない訓練をやってくる月詠様でも全員とやれというのは可能性として
は低く………ないな、多分全員とやる羽目になるだろう。

月詠様の波長を見てみたが、いつもより少し波長が短い。しかも、小さい声だが「ふ
ふふふふふふふ」なーんて言う風な不穏な音が聴こえる。きつとその顔はアニメとか
漫画で言う悪役の顔をしているだろう。

波長が短くなるのは月詠様の癖で感情が出ている時は少し、本当に少しだけ波長が短くなる。マジでほぼ変わらないので正直怖い。

ちなみに月詠様からは波長は全くと言って良いほどできていない。しかし、人の波長を見ている時に、自らが出した波長が跳ね返ってきた波長を見ると、その対象から出ている波長とほとんど同じだったので月詠様にもやってみたら普通に読むことができた。

それ使っても月詠様の波長は見辛いのは変わらないけど。

「月詠様、一応聞きますけど、誰と打ち合おうんですか？」

取り敢えずは聞いた方が早い。十中八九、ほとんど全員とやることになるだろうが、一応確認で聞いてみた方が良いと思う。なんでかっていうと、始まる前に聞いたり、相手から聞くよりはまだ諦めが付くし、心の準備に要する時間が少し増える。どうせ逃げられないし……

「ん？ああ、全員だよ。」

予想通りの答えが返ってきた。しかし、流石にあの人たちをたつた一人で挑むというのは無謀だと思う。大の大人をぶつ飛ばす位の力を持つてる時点で、俺もそのぶつ飛ばされた側になりかねない。だから、何かしらのルールがあると思ったので聞いてみた。少しの配慮位はあるはず！

「ルールとかはありますか？」

「うん、あるよ。」

「月の民の兵士たちにくら私が鍛えた剣術だとしても、玉兔が戦うのは、流石に無理があるからね」

いくら月詠様でもそこは考慮してくれていたみたいだ。ルールが無かったら無かったで結局やる羽目になるだろうが。

「でも、レイがぶつ飛ばされてるのを見るのは面白そうだけどね」

「……………やめてくださいよ？」

「大丈夫大丈夫、冗談だから」

こっちは冗談に聴こえなかったのだが？いつも月詠様は面白い！って思ったことは絶対と言って良いほどやるので、付き合うこっちは気が気でない。

例えば前世の話をした時、特にアニメの話をした時。その時に俺が話したアニメキャラの技をやりだす。本来ならばそのアニメキャラの技に憧れて真似をしようと思っても、そこは現実のなかにいるただの一人の人間。出来るわけがない。

しかし、こっちはどうだ？月のトップであり神でもある。しかも最高神の部類にはいる神格を持つのだ。それがアニメの技を真似をしようとする大体は出来てしまうのだ。

それで相手をするのは誰だと思う？もちろん俺がやることになる。『訓練の一貫だよ！』といって『かめ〇め波！』とか『水の〇吸 壺〇型 水〇斬り！』と技名を叫び俺にアタックを決めてくるので大分きつい。そして、大体ぶつ飛ぶ。

それを考えれば目の前でやっている打ち合いでぶっ飛ばより、月詠様にぶっ飛ばされる方がきついいとおもってしまう。まあ、そんなことが良くあるので月詠様との会話の中に『面白い』がある時には、少々過剰に反応してしまうのだ。

「あ、もうちよつとで始めるから手短かに説明するね」

「あ、わかりました」

早速始めるみたいだ。回りを波長で確認すると、いつの間にか先ほどまでやっていた打ち合いが終わっていて、もう用意ができてしまっている。もう少し時間を掛けてくれると良いのに。

「それで、今回の打ち合いのルールだけ……」



「レイ頑張れー！」

月詠様は道場の端の方にある席に座っている。俺の目の前には月の民の兵士の人たちが全員ずらりと正座して並んでいて、俺に対して身体に穴が空きそうな位にらんでい
るだろう。そして、俺の横には、先ほど月詠様から渡された少し長目の竹刀が置かれて

いる。

正座しているのは、さつき月詠様から教えられたルールの内で、月詠様が始めの号令をした瞬間に竹刀をもち、試合を始めるというものだ。だから、俺だけじゃなくて向こうも利き腕の方に竹刀が置かれている。このルールは正式な試合に使われるらしい。

一応こんなものでも、ちゃんとした試合らしいのだ。たとえ一人対大勢でも、試合は試合らしい。とにかく、こうなつた以上やるしか無いだろう。

ルールを説明してもらおうときに教えて貰つた月の民の兵士たちの弱点。これを有効活用することが出来れば、勝つことはできなくとも、ぶつ飛ぶことはないはずだ。でも『レイ……………勝たないとわかつてるよね?』なんて言われたら勝つしかない。なにされるかなんて、想像するだけでも恐ろしい。

「それじゃあ……………」

おっと、もう始まるみたいだ。正直不安しかないが、頑張るしか無いだろう。やる前に出来ないと決めつけるのは良くないしね!

「始めッ!!」

「うおおお!!」

ズドンズドン

座っていた兵士たちが一齐に立ち上がり、俺に向かつて飛びついて来る！かと思いきや、全く来ない。先ほど一度に立ち上がったため、前の人たちはそれを回避したが、後ろの兵士のほとんどは大きな音を立て、ずっこけてしまっている。

これは月の民の兵士たちの弱点の一つ。一人一人の闘争心が強すぎるため、全くと言って良いほど連携がほとんどとることが出来ないのだ。聞いた時は冗談だと思ったが、いざ始まって見ると確かに全く連携が取れていない。邪魔な仲間を殴ってぶっ飛ばしてゐるぐらいだ。月詠様に聞いていなかったら、俺は綺麗にずっこけていただろう。

がしかし、先ほどの珍事を回避した兵士たちが俺に迫る。

連携は取れてなくとも、個々の実力はとんでもない位高いのだ。そんなことを考えている内に、一人が俺に対して突っ込んできた。すぐさま、足に力を入れて後ろに飛ぶ。

ビュンツ

「んなツ!?!」

相手の竹刀が甲高い音を立てて俺の鼻にかする。少々、危なかったが降る速度は月詠様より遅かったので、まだ全然避けられるな。それを考えると、月詠様の剣速はどれだけ早かったのかがわかる。

今さっき俺に突っ込んできた兵士が、どうやら避けられることを予想していなかったみたいで、大きな声で驚きの声を上げている。その上、動きが少し固まってしまっている。

バシツ

直ぐ様避けた時に少し崩れた体勢を立て直し、相手の首の横を竹刀で打つ。

「う……………」

どうやら、綺麗に首に入ったようで波長を見てみると、気絶してしまっている。うーん、まさか一発で気絶するとは思っても見なかったな。

そこまでするつもりはなかったなので、申し訳ない。ルールでは、気絶させても良いが、当てるだけでも良いという物だったから尚更だ。

でも……………

「「貴様ああああ!!」」

全員、気絶させないと終わらなさそうだ。

「ふう」

さて、どうすれば勝てるかな。

序章・第十四話

「うらあ!!」

男の低い音の叫び声と共に目隠しをした一匹の玉兔に、ものすごい勢いと早さで竹刀が迫る。が

「……ふっ」

息を吹き、目にもとまら無い早さで、相手の迫る竹刀を跳ね返す。すると相手の男は一瞬驚いた顔を見せた、かと思う暇もなく

バアン

と容赦無く月の民の兵士である男は玉兔に頭の上から打ち込まれ、道場の床に倒れ伏す。周り見ると、今倒れ伏せられた男と同様に何十人も倒れ伏し、もう数人しか残っていない。道場の端の方では、玉兔に竹刀で打たれたのだろう、気絶している者たちでゴった返している。

一体どういことだろうか？

……私はいつも通りに玉兔の訓練と自分の鍛練を終わらせ、月詠様の屋敷の巡回をしていた。そんな中、普段は静かな道場前を通った時に、中から小さな音が聞こえたのでのぞいて見ると月の民の兵士たちが一匹の玉兔に対して試合をしているではないか。しかも、兵士たちが押されている。

いつも兵士たちが試合や鍛練をする時は、私は基本的に呼ばれることが多い。向こうから試合と言うかなんと言うかまあ、リベンジのようなものを挑まれているだけだが。「今日こそは勝つ!!!」と言う風にもいつも全員でかかってくる。

バアン

断ることも出来るが、普段の相手の無い鍛練よりはましなのでいつも受けている。でも、手応えは余り無いのでいつも私が勝つ。何故かと言うと、兵士たちの一人一人の強さはそこまで高く無いからだ。威勢はいいのだが、連携も取れていないし……

バーン

正直私やお姉様、月詠様とお師匠様以外の兵士は基本的にこの月の科学力に戦闘の面でかなり頼ってしまっている。武器だつて、戦闘になつた時に兵士たちが使うのは、鍛練している剣術や槍術ではなく、銃や大砲、レーザー砲などの重火器で、訓練内容もそちらの方が多し。

このような試合などで使うのは剣や槍などの古典的な武器だけ。毎日剣術の鍛練をしている私にとって手応えがないのは当然だ。

しかし、いくら私に勝てないとはいえ、たった一匹の玉兎。しかも目隠しをしている玉兎にあれだけ押されるのはどういうことだろうか？ちよつと打ち合ってみよう。しかし、それになんて私が呼ばれなかったのだろうか？大体こういう試合をする時は月詠

様が皆を集めるのだけれど……

私はなんで呼ばれなかったのだろうか？

兵士たちだけで鍛練がしたかったのだろうか？ いや、違う。それは玉兔がいる時点でそれはない。私と戦いたくなかったのだろうか？ いや、それも違う。あれだけ大きな声で「今日こそは勝つ!!!」と叫べるのだから、急に変わるとも思えない。

「うーん」

わざとらしく首を捻ってみるが、全く答えは出ない。一体どうしたものか。

「あら、依姫。なに扉の前で悩ましい顔をしてるの？」

「あ、お姉様」

そうだ、お姉様に聞けば良いだろう。いつも私が知らないことやわからないことを、良く教えて貰っているので今回も知っているかも知れない。

ガンツ

「お姉っ……………」

「?」

なんでお姉様画ここに要るのだろう?この試合について聞こうとしたが、驚いて思わず覗いていた扉の隙間を勢い良くしめた上に、舌を噛んでしまった。

「ゴホツ…………お姉様何でここにいますか?」

お姉様は大体いつも桃の収穫をしていて、道場に足を運ぶことはない。なのになんで

今日、タイミング良く私と会うのだろうか？そんな素朴な疑問に対して、お姉様が答える。

「月詠様に呼ばれたからよ。『後で道場に来てくれるかな』って。用件は分からないけれどね」

「月詠様に呼ばれたんですか？」

となると……いや、なんで？なんで月詠様がお姉様を呼ぶ必要があるのだろうか？しかも道場。鍛練を基本しないお姉様とは、全くと言って良いほど無縁な場所だ。そんな場所にお姉様を呼んでなにをするのか？

「ええ。依姫も呼ばれたんじゃないの？」

「え？いや……私はただ巡回してただけです」

しかし、何故私は呼ばれていないのだろうか？お姉様は呼んで私は呼ばれないことと

は一体……?」

桃についてのこと? いや、違う。月詠様は桃のことをわざわざお姉様に聞いたりしないし、そんなことで道場に呼ぶ意味が分からない。

まさか、お姉様の鍛練? 普段桃ばかり食べていて鍛練する様子なんて想像できない。しかも、鍛練しなくてもお姉様は能力だけで十分過ぎるぐらい強いので、鍛練をする必要はない。いままでやってこなかったのに急にやりだすとも考えにくい。

「うーん?」

なんだか余計に分からなくなってきた。色々考えてみるが、頭がこんがらがらるばかり。何で私は試合に呼ばれなかったのか? 何でお姉様だけ呼んだのか? これは呼んだ月詠様に聞くのが一番良いかもしれない。

「お姉様私も付いていっても良いですか?」

悩んで立ち止まるより、まずは行動に移すことが大切! 直接聞きに行くのが良いだろう。いつも月詠様は試合で兵士たちを集めたら、大体端っこの辺りで試合を見ているの

で道場内にはいるだろう。まあ、お姉様をここに呼んでいるということは、大体居るところとはわかるのだけれど。

「ええ、良いわよ」

「では、行きましょう」

ズズズ……ドン

お姉様に許可を貰い、早速先ほど覗いていた扉を開ける。開けるときにはいつもこんな重そうな音がするのだが、そこまで重くないので片手で開けられる。

「やあ、二人とも来たね」

開けた瞬間に聞こえる落ち着いた感じの声。まあ、もちろん月詠様である。扉の前で仁王立ちしているところを見ると、私たちが来るのをまつていたのだろう。後ろには先ほどの目隠しをした玉兔がこちらを見ている？のだろうか？顔をこちらに向けている。さて、月の兵士を打ちのめした玉兔も気になるところだが、それよりも先に確認しなくてはならないことができた。

二人ともとはどういうことだろう？

「二人とも？」

「うん、そうだよ？」

私は驚いて思ったことが、うつかり口から零れてしまった。何故だろう？私には呼ばれた記憶がないのだが？まさか、忘れていた？いや、私はいつも予定等は聞いてから直ぐにメモなどに書くので、忘れることはない。その上月のトップ、月詠様との予定という大切な予定を忘れるわけがない。しかし、万が一も考えられる。もし、私が忘れていたのなら………

「ねえ依姫、メールじゃないの？」

そうお姉様に言われてその存在にを思い出した。月詠様は月の使者などの軍の全ての端末に、自分の電話番号や連絡先をいれている。これは緊急事態が発生した時や、月詠様に何かあった時に使用するためにあるものだ。月で何か有ること事態が珍しいので、使ったことはないけれど。

「失礼します」

月詠様にことわりを入れ、凶ぐ様端末を起動する。私はいつも、月詠様屋敷を巡回したり、玉兎を訓練したりする時は通知音が出ないように設定している。月の使者としてのこともあるが、静かな月詠様の屋敷の中で通知が鳴るとか、恥ずかしいので切っているのだ。

まさか、それが災いするとは思ってもみなかった。

そんな感じに落ち込んでいる依姫のスマホには『ちよつと道場に来てくれる?』というメッセージが月詠様から届いていた。

序章・第十五話

「終わった……………」

道場の真ん中でそう呟く。

そんな俺の周りには、俺が竹刀を打ち込んで気絶している月の兵士たちで埋め尽くされている。中には起きている人もいるけど、打ち込まれた所が痛むのだろうか？ 動く気が配がない。

試合だったとは言え、申し訳ない。俺も訓練で、いつも月詠様に打ち込まれた時は、死ぬかと思った。昔は一、二発当たっただけで気絶していたのだが、今ではある程度耐えられるようになってしまったので、何発も食らうことになるのでかなりポロポロになる。それでも、結構避けられるようになっていた。

いまさっきだって、何発か食らってしまったので、右腕の手首と、左の太ももがはれてしまっている。みえないが、多分赤くなっているだろう。動かしても痛くはないが、

また同じところに当てられたら痛そうだ。

試合のルールには当ててる場所に指定があつて、それは急所だけ。他は当たつても問題は無い。どうせなら当たりたくなかつたけどね！痛いから！因みに、急所と言うのは首のことで、当てるのはその試合の相手側の者でなくても良い。だから、自滅した兵士たちは気絶した時点で試合から離脱しなくてはならない。

「ふう」

このルールのおかげで、結構の数の兵士たちが自滅してくれたので、少しは楽になつた。それに流石にあの量を一気に相手をして、生き残れるとは思えない。月の兵士たちの連携が取れてなくて良かったと思う。教えてくれた月詠様に感謝である。

そんな今日の試合で、分かったことがある。

『月の兵士たち、力が強い』と言うことだ。まあ、俺の力が弱いだけなのしれないけど。理由としては試合中、竹刀と竹刀がぶつかり合った時、必ず俺がぶつ飛ばされるからだ。しかも、かなりの距離だった。他にも、体勢を崩したときに太ももに打ち込まれた

一撃によって、足に激痛が走った上に、道場の端の壁に叩き付けられた。

死ぬほど痛かったよ……あれ。

もう、あの威力はトラックがぶつかってくるより強いと思う。ああ……もう受けたくない。もうあんな風にして吹っ飛ばされのはもう勘弁してくれ！である。

それにしても、前世から比べるとずいぶん頑丈な体を持ったものだ。トラックがぶつかってくるより強いと思われる攻撃で「ちよつと腫れちゃったなあ」位で済んでいることに驚きだ。

自覚は余りなかったけれど、人間辞めちゃったんだよな、俺は。まあ、でも当てられた時に備えて、体自体を妖力で覆っていたから、軽症で済んだだけだが。覆っていなかったらどうなってたんだろう？

……怖いから想像するのは止めよう。

しかし、それを考えると妖力って便利だなとつくづく思う。身体強化もできるし、守れるし、スマホ充電できるし、能力使えるし。万能である。

まあ、回復にはちょっと時間がかかるけど、そこまでじゃあない。時間がかかると言っても、1日しつかり寝たら完全に回復するので、本当にちよつとだ。

『プルルルル』

「ん?」

頭の中にスマホの通知音が響く。これは波長による通信だ。スマホや通信機から出る電波などを受信し、それを頭のなかで流すものだ。因みに返すときは自分から波長を出すのだが、周波数が合わないと通信できないので、自分の周波数を決めている。

これが出来るようになったのは結構昔のことなのだが、どうにも頭に声が入って来るのに慣れず、余り使っていなかった。

が、周りの波長などを見たり感じたりしていたら、慣れてしまった。たぶん、慣れた

のは通信じゃなくて、能力の方だと思う。元々無かったものが体に有るのだから、感覚が合わなかったり、自由に使えないのは仕方ないことだろう。それを考えると、慣れて怖いな。

あ、それよりも先に電話に出ないと。

『何ですか？月詠様』

さて、電話の相手だが、あいにく俺は月詠様の電話番号しか知らない。つまり、月詠様である。

『お疲れ様、良く頑張ったね。まさか、勝つとは思わなかったよ』

『ありがとうございます』

『そういえば、何発か喰らっていたけれど、大丈夫？』

『あ、はい。ちよつと腫れている位ですね』

なんかちよっと痛くなってきたけど。

まあいいか、そんなに気にする程の痛みじゃない。それよりも、わざわざ同じ道場内にいるのに連絡してくるとは、月詠様は何か俺に急な用ある……

『終わったばかりで疲れていると思うけれど、道場の入り口に来てくれるかい？』

みたいだ。

『次は何をやるんですか………』

『まあまあ、来てみれば分かるよ』



「すみませんでした！」

「大丈夫大丈夫、どちらにしても来てくれたしね」

さて、来てみたはいいが、これは一体どういう状況だろうか？何でか知らないけれど、月詠様に対して誰かが謝っている。何かやったのだろうか？それにしても月詠様の波長もそこまで短くないし……………

まあ、月詠様が怒っている所なんて見たことないけれど。

「久しぶりね。百年ぶり位かしら」

「え？」

横から声がしたので振り向いて見ると、いつの間にか誰か立っていた。波長は月詠様

に對してだけ飛ばしていたので、気付かないのは当然なのだが、足音が全くしなかった。視界がない分、俺は音を聴くことに關しては自信があつたのだが、全く気付かなかつた。その事に少し背筋が凍る。

視界がない分、俺は音を聴くことに關しては自信がある。だと言うのに、全く気が付かなかつた。まあ、足音が聞こえない神は近くに居るのだけれど、同じように足音が聞こえない人は初めて見た。

それで、久しぶり?とはどういうことか。残念ながら、俺は全く覚えていない。

「あら、覚えてないの?」

『はい、覚えてません。』などとは言う勇氣はないので、全力で頭を回転させ思い出そうとするが、微塵も出てこない。人の波長は一度見たら大体は覚えているので、忘れる筈は無いのだが……

うーん、あつたこと……

「あ、そういうえばあの時はこんな目隠しについて無かったわね」

「あ」

なんて考えていたら、いつの間に後ろに回っていて、止める間もなく、目隠しをほどこられていた。

ピラッ

動物の目には入ってくる光を調整する機関、瞳孔と言うものが付いている。明るいところにいると光の量を抑えるために狭まり、暗いところにいると光をなるべくたくさん得る為に大きく開く。

今のレイは目隠しにより、入ってくる光の量は少なく、瞳孔は大きく開いている。そ

の上、いつも付けていることもあり、通常よりも開いている。その分、たくさんの光が入ってきて……………

「目があ……………目があ……………」

網膜がダメージを受けてこうなる。

序章・第十六話

久しぶりに自分の目の中に入ってきた光により、俺の視界は奪われ、それと共に痛みを感じる。そのせいで、俺は咄嗟に目をつぶる。

痛つたい……………

俺が目を開けていたのは、今の一瞬だけだったのに、ここまで痛いとは思わなかった。痛う……………涙が出てきたよ……………

「ごめんなさい。大丈夫？」

「は、はい。大丈夫です」

向こうが心配した声で謝ってくる。波長を見ても、波の振りは高く、少々短い。心配

してくれているのだろう。それは分かる……………分かるのだが……………

どうせなら、とらないで欲しかったなあ……………目隠し。

だが、そんなことを言っても、俺の目が痛いのにには変わりはない。取り敢えずは視界を回復させよう。目に万能妖力薬（ただの妖力）を流し、回復を早める。

生き物の目はほとんどが、何かから反射された光を受けて、回りが見ることが出来るようになっていて。が、俺は目隠しをし、回りが見えなくても、能力により回りの状況は確認出来るようになっていて。俺の基本見ている波長はただの電波だ。だから、その波長を当てている対象の色までは、残念ながら分からない。

あることで俺はそれを痛感した。少し前、キッチンに置いてあった紅茶と間違えて、シンクを掃除するために用意していた洗剤を飲んでしまったのだ。しかも結構の量。

苦かったな……………洗剤。

あの時の俺はホントにバカだったと思う。その後、そんな苦さをのけようと思ったのだろう。少し洗剤の入っていたコップにその洗剤を捨てることなく、そのまま蛇口から水を注いで、それを勢い良く飲み干した！

当然ながら洗剤は俺の口の中で泡立ち、それを吐き出したせいで、キッチンには泡だらけになってしまった。そのせいで、二週間位は味を全く感じれなかったよ……

またこのような目に遭うのは絶対に嫌。だから、さつさと回復させたいのだ。今だつて、色が分からないせいで、誰が誰だか分からないので速く回復したいのだ。月詠様は波長で分かるけど。

さて、こういうときは少しづつ光に慣れていくしかない。それも数十年分。そうと決まれば早速少し目を開けて……

ブワツ

「あれ?」

目を開けたとたんに、目から大量の涙が決壊したダムのように溢れてきた。そのせいで、少し時間がたって回復していたはずの視界は曇り、ほとんど何もみえない。

「あら?涙が出てるじゃない」

「んう!？」

いつの間にか俺の目の前に来て、涙を布の様なものでふいてくれた。そのおかげで、どばどば流れ出てくる涙が少し収まった。しかし、おかしいな、いつの間にかこの人は俺の目の前に来たのだろうか？おかげで、驚いて変な声をだしてしまったではないか。

俺はいつも探知用の波長は出し続けている。さっきだって、波長は出していただけれど、揺らぎさえしなかった。本来、何か行動する時は音だったり、熱だったりとか何かしらの波長を出す。がしかし、ここまで一度も、この人はそれを俺に感知されずに俺の目の前に来たり、気付いたら後ろにいたり、まるでワープでもしているかのような動きをしている。

こんな世界だ、ワープとか瞬間移動とかが出来た人は沢山とは言わないが、少しはいるだろう。恐らくは何かしらの能力だと思うけど、どのような能力だろうか？案外そのまま『ワープをする程度の能力』とか？そんな簡単な能力ではないと思うけれど。



「本当、ごめんなさいね」

「いえ、大丈夫ですよ。ちゃんと見えますしね」

先ほどの大量の涙が収まった頃、再び向こうが謝ってきた。波長はさつきと変わらず波は高く、短い。まだ、心配………とか申し訳ないとかそう言う感情だろう。

相手は結構気にしているかもしれないが、俺自信余り気にはしていない。どうせ目が見えなくても波長でなんとかなるし、妖怪だからすぐ治る。だから、余り気にはしていない。痛いのは余り好きじゃないけど。

視界が回復したので、相手の方を見る。髪は金髪でとても長く、腰あたりまである。

頭に被っている帽子の上にはそこそこ大きな桃が二つ。不安定そうにグラグラと揺れて、今にも落ちそうである。なんで落ちないのかが不思議な位だ。

さて、久しぶりにひとの顔を見たからか。もしくは元から思っていたような気もするけれど………

この世界、美男美女が多すぎではなからうか。

たまたま自分の近くに沢山いるだけかもしれないが、それを考えても逢う人逢う人とも顔が整っている。月詠様は白色と言う珍しい髪の色に似合う位イケメンだ。目の前の人に至っては、顔は日本人のようなのに染めたような金髪ではない。月の化学力のおかげかもしれないが。

「それで、覚えているかしら？」

当然覚えている。

俺がこの世界に転生してきた初日、いきなり襲われたことは今でも鮮明に覚えている。もつとも、襲いかかってきたのは目の前の方ではなく、もう一人のピンク色の髪

人だったが。

インパクトとしてはそちらの方が強かったけど、襲われて、心が疲弊しているところに甘くてジューシーな桃。疲れた精神を建て直してくれたことは今でも感謝してもしきれない。

でも、いきなり桃を渡してきたときは正直驚いた。なんの予兆もなく目の前にきて、桃を差し出してくるのだから驚くと言いか混乱した。が、桃が美味しかったので、そんな考えはすぐに吹っ飛んだ。

そういえば、あの時早く部屋に行きたかったから、名前を聞くのを忘れていた。いつも、この方を廊下で見かけることはないし、聞くことが出来ていなかった。

だから、今がチャンスであろう。

「すみません覚えてはいるんですが、お名前が分からないので、教えて貰えませんか？」

「あら、教えてなかった？」

「自分が忘れていただけかもしれませんが、間違えるのは失礼だと思っていますので」

「まじめねえ」

よく言われる。が、別に自分は別に真面目ではないと思っっている。今生でどう思われているかはわからないが、前世ではよく言われていた。

母親や友達に「△△△は毎朝早くに起きて真面目ねえ」とか「△△△お前宿題終わらせるの早すぎだろ……真面目か!」といった感じに言われていた。母親に「あなたそんなので、辛くないの?」と心配までさせてしまった覚えさえある。

しかし、自分は好き勝手にやっているだけと思っっている。宿題は残っっているといやで、早く終わらせて他のことに時間を使いたかっただけだし、早起きするのは大学の講義で寝ないようにするためだし……

自分でやりたいことをやっているだけ。だから、真面目とは違うと思っっている。そう自分で思っっている、他の人は思ってはくれないみたいだ。

相手の真面目と言われたことに対し「そんなことないです」と返したら、「真面目よ」と帰ってきた。いくら自分が真面目なのを否定したとしても、確実に肯定されるのは前世で経験済。よって、これ以上言っても『俺〓真面目』のレッテルが貼られるのは止められない。どうにかなんないかなあ……

序章・第十七話

「綿月豊姫よ。よろしく」

「レイと申します。よろしくお願いします」

少し強ばった声で自己紹介をする。いつもこんな風に自分の名前を言うとき、少しだけ緊張してしまう。たまたま噛んでしまったり、詰まってしまうと言ったことが前世では良くあった。

……まあ、俗に言う人見知りと言うやつであろう。初めて話す人、逢った人に対してこのようなことになっているので、間違っではないかと思う。

さて、名前がわかったところで次に大事なのはどう呼ぶかである。さんとか様とか………そう言う風に目上の人だけではなく、初めて話す人には付けた方が良いと思っ
ているので、自分にとってはとても大事だ。幸い、目上の人かどうかは首もとに有る階級

章というもので分かるので問題はない。

目隠しを外され見えるようになった目で確認する。

『えつと……線なしの星2つだから、上から三番目の使者……』

自分よりも圧倒的に目上のお方である。どれくらい離れているかを自分の階級と比較して言うと、自分の階級は線が一本入った准尉と呼ばれる、中間管理職みたいな物である。おおよそ上から10番目ぐらい。使者と言うのは属に月の使者と呼ばれる月の民の幹部中の幹部であり、地上に向くことの出来る唯一の役職である。とはいえ実際に地上に行くのは配下の玉兔だけだが。まあ、そんな上流階級とは自分は無縁なぐらい離れているのだ。

それに、この准尉と言う役職は月詠様が月を統治する権力を利用して、俺に与えた物であり、その階級がするような仕事は一切行っていないので、実質形だけあるため意味は余りない。

これから分かるように、滅茶苦茶上のお方である。

が、そんな人が目の前にいても特に驚きはない。急に消えたり現れたり、波長のレーダーが全く反応しなかったりと言うような異常なことが有った時点で『あーこの人月の使者かも』と予想していたので、余り驚きはしない。

でも、さすがに目隠しを外してくるとは予想出来なかつたけど。

豊姫様が月の使者だと言うことを予想出来たのは、月の使者が上層部のように権力や血筋からではなく、実力で選ばれているからだ。それを考えれば、自然と豊姫様が月の使者であると言うことが分かってくるだろう。

あ、波長レーダーが反応しないことは、廊下とか道場とかどつかであつていたのかも。そうしたら桃のこと、お礼が言えたのになあ。

パアン

そんな風に考えていたら、急に静かな道場内に大きな、竹刀と竹刀が勢い良くぶつかり合う音が響く。何事かと音がなった方向に目を向ける。

……するとそこでは、先ほどまでは月詠様に全力謝っていたポニーテールの人がおもいつきり月詠様の竹刀に己の竹刀を打ち付けていた。結構離れているのに、ここからでも両方の竹刀がとんでもなく曲がっているのが良く分かるくらいに曲がりまくっている。良く折れないな、あの竹刀。

まあ、波長を見る限り霊力もしくは神力で強化しているのであろうが、限度があると思う。自分だって武器が壊れないように妖力を纏わせることはあるのだが、精々固くして壊れにくくするだけである。なのに、あの竹刀はどうか？一向に折れる素振りを見せようともしない。むしろもつと曲がっていきそうな位だ。

さて、一体どうしたら謝っている相手に対して竹刀を打ち付けることになるのだろうか？普通、謝っている相手に対して竹刀を打ち付けることなどないと思うのだけれど、今にも打ち合いが始まりそうにガンを飛ばし合うといった感じにはならないはずなのだけれど……

ダアン

ああ、始まつちやつた。

月詠様がピンク色の髪を持つ、ポニーテールの人を竹刀ごと弾き飛ばした。それによりポニーテールの人は一気に道場の壁までとばされた。しかし、それに負けじと飛ばされて近付いてきた壁に対し目にも止まらぬ早さで蹴りを入れる。それで一気に月詠様の目の前まで接近し、竹刀を振るう。

ブンツ

が、それは空を切る。月詠様は横に一步だけ下がり、その攻撃を回避した。攻撃を避けられ、体勢を崩したポニーテールの人に今度は月詠様が後ろに回り、打ち込もうとする。俺は避けることが出来ずに打ち込まれたと思ったが、すぐさま反転しその攻撃を防いでいた。

バァン

次の瞬間大きな音が響き、二人の姿が消える。

「え、」

あれ？どこにいった？と急に消えたことに驚きを隠せず、声が出てしまった。波長を出して、今もどこにいるかはだいたい分かるのだが、目が見えるとそちらの方への意識が強くなってしまう。

意識がそちらの方に引つ張られてしまうのは、まだ視覚に頼っている証拠だ。両立出来るように頑張らないと。まあ、目隠しのけたばかりだし、仕方ない面もあると思うけれど、慣れていかなくては。

バアン

さて、あの二人はどこに行つたのか波長で見ているが、道場内を点々としていて、位置が捉え切れない。現れては消え、現れては消えの繰り返しで、正確に位置を捉えられない。つまり、二人はとんでもなく速く移動しているのだろう。……ことごとく前世の常識をこの世界はぶっ壊してくるなあ。

俺が出している電波の波長は、強さによって差はあるけれど、おおよそ秒速30万キロメートルほど。俺はその波長を対象に当て、跳ね返ってきた電波を受けて対象の位置

を特定する。が、この二人は速過ぎるため、お互いの竹刀が当たり、減速した時にだけ電波が跳ね返されて位置が分かる。だから、点々でしか分からないのだ。

速すぎて、波長が全く追いついていない。無論、肉眼では見えない。たまにチラッと白とピンクの影が見えるだけだ。そのせいで、道場内は誰も居ないところから馬鹿みたいに大きな竹刀の打ち合いの音が聞こえ、軽く心霊現象みたいな状況になっている。

どうしたものか……

一応自分は月詠様に呼ばれてここにきたのに、こんな状況では話すら出来ない。止めた方が良さだろうか？ いや、止めるにしても自分だと止めるどころか、巻き込まれてブツ飛ばされてベッド行きになる結末しか見えない。

それは勘弁したいところだし、やらない方が良いのだろうか？ いや、止めないと全く話が進まない気がする。止めた方が良いのではないだろうか？ 何で呼ばれたか気になるし。しかし、止めるにしても、自分一人ではどうにか出来る気がしない。誰かに手伝って貰えたら良いのだけれど……

「あ」

そう考えていたらふと、この場に自分一人ではないことを思い出した。直ぐ様もう一人の方をみる。

「？」

急に見たせいとか、顔にはなマークを浮かべ、不思議そうにこちらを見てくる豊姫様。その顔を見て、豊姫様に手伝って貰えばいいのでは？と考えた。豊姫様は実力のある月の使者であり、俺の波長をくぐり抜けてくるような人だ。あのヤバい二人をきつと、止めてくれるはずだ。

………だけど、もし止めれるとして、俺が頼んで止めてくれるだろうか。俺はただの玉兎だし、階級もかなり下。そんなやつ頼みを聞いてくれるかどうかを考えると、少々不安である。

が、行動もせずに決めつけるのは駄目だ。まずは頼んでみないと何も始まらないし、何か変わるようなことはない。だから、ダメ元でも良いから頼んでみよう。

「あの、月詠様を止めるの手伝ってもらっても良いですか？」

序章・第十八話

「ええ、良いわよ」

恐る恐る聞いたのだが、案外軽く了承の返事がもらえて良かった。手伝ってくれと分かったのが良かったのか、少し体から力が抜ける。

「それで、どうやるの？」

が、また災難はやってくる。協力する以上、あのヤバい二人をどう止めるかの方法を当然聞かれるのだが、今のところまだ決まっていない。つまり……ヤバいのだ。いくら手伝うからといって待つてくれるわけではないし、待たせて手伝わないとかいわれたらもう詰みである。早く考えなくては………！

「う、ああ……ええつと……ちよつと待つて下さい」

とはいえそんな急に考えても、良い考えなどすぐに出る筈もなく、ただ焦って情けない返事しか出てこなかった。

「焦らないでゆっくり考えなさい。待っててあげるから」

「すみません……」

よ、良かった……待っていてくれるみたいだ。でも、どちらにせよ急がなくては。長い時間待たせるわけにもいかないし、何より早くしないと道場が穴だらけになってしまふ。先ほどからあの二人が更に加速したのか、肉眼でも確認出来るぐらいの衝撃波が道場内を点々としていて、壁や床が所々穴が空いている。

……あれ？二人が持ってたの竹刀だけだったよね？それにここの壁って結界張ってるんじゃないかな？まあ、あの二人が自分の常識では説明しようがないので置いておこう。気にしてたら頭が痛くなる。とにかく早くしないとこのまま道場は穴だらけ、最悪倒壊まで逝きそうだ。急がなくては。

さて、自分の持っているあの二人を止められそうなのはあるだろうか？取り敢えず

整理をしよう。

能力は、波長を操る程度の能力。大体の波長を操れる。いま現状操れるのは精神の波長、通信の波長の2つ。通信の波長は二人が早すぎて、波長が追い付かないので使い物にならないから却下だ。波長を飛ばして使うレーダーも意味がない。

……あの二人が早すぎて。

そうすると使えるのは精神の波長ぐらいだろう。そうなのだが、正直あんまりこの波長は見るということにはよく使うが、操るということはしない。

精神の波長を操る……つまり感情を操るということ。感情が操れたら、話し合いに置いて自分に有利に話を進められたり、今のような打ち合いであれば、相手を怒らせて太刀筋を崩したり。人の精神を操るということは非常に便利ではあるが、その時出てきている感情は自分に操られて出てきた偽物。そういうのは自分は嫌だし、やられる方も嫌であろう。だから操ること事態試したこともなかった。おかげで操ったことのあるのは自分のだけである。

波長が使えないとなるとあの二人を止めるのに使えそうなのはただ1つ、豊姫様の能力だけである。あのワープする能力、条件が自分の思っている通りなら、かなり有用だ。他に手が無くても、これだけで何とかなってしまういな位に。

取り敢えず豊姫様の能力の詳細が分かれば良いのだが、これがまた聞きづらい。能力

と言うのは強いていえば前世でいう住所だったり、電話番号。その他諸々の個人情報みたいなもので、人に簡単に教えてしまえるようなものではないと自分は考えている。そんな大事な物の詳細など聞いて答えてくれるとも思わない。しかも、階級がめっちゃ下の俺からなど……普通教えないだろう。

「能力つて教えてもらうことつてできますか？」

とはいえ、聞かないことには始まらない。自らの気が怯まないうちに覚悟を決めて聞いてみた。

「教えても良いけれど……理由を聞いても良いかしら？」

やっぱり聞かれるか。そりゃ部下から「あなたの個人情報教えて!!」なんて言われたら戸惑ったり理由を求めたり……とはいえ今はちゃんとした理由があるので正直に答えたら良いだけだ。

「豊姫様が急に現れたり消えたりと不思議な動きをしていたので、転移系の能力かと予

想しました。もしそうなら、あのお二人を止めるのに役にたつかと思ひまして。」

「そう、なら構わないわ」

良かった。ちゃんとオツケーしてくれた。

「にしても気付いてたのね、私がちよくちよく移動してたこと」

「見てましたから」

「貴方みたいな玉兎は珍しいわね。良く観察できているわ。本当、あの子たちに見習わせてやりたい位だわ」

あの子たち？ああ、イーグルラビイのことかな？月の使者だし、指導位しているのだらう。

「それで、私の能力のこと、教えてあげる代わりにあなたの能力を教えて貰える？ 交換条件よ」

自分の能力？ 何故そんなことを聞くのだろうか。意味がわからない。玉兎は『波長を操る程度の能力』をもち優劣はあれど、自分以外の玉兎も持っている。それに玉兎はこの能力以外は持たず、なにか他の能力を持ったこともない。だから聞く意味がよくわからない。

あ、もしかしたら能力の有無を聞いているのかも。ここは無難に答えよう。

「波長を操る程度の能力です」

「そう、それなら良いわ」

少し残念そうに答える。結局、特に詳しくなど聞かれることは無かったのだが、いつたい何だったのだろうか？ 深く問い詰められるようなこともなかったし……まあいい

や、今は目の前の問題に当たろう。

「それで、どのような能力なんですか？」

『山と海を繋ぐ程度の能力』よ」

山と海を……繋ぐ？自分が考えていた能力とは全く違うように思える。自分が予想していたのはもつとそれっぽい、いかにもワープしそうな能力……つまりそのまま『瞬間移動する程度の能力』とかそんな感じだと思っていたが、甘かった。能力名を聞く限り、転移したりとかいう能力でないことがわかる。だって山と海を繋いだところでワープとかはできるはずないだろう。

しかし、実際には消えたり現れたりワープをしているような動きをしているので、この能力を使っていると思われる。だとすると能力の応用だろうか？どうやっているのかは分からないが。まあ、聞けば良いだろう。

「この能力、どう使うんですか？」

「そうねえ……分かりやすく言ったら点と点を繋ぐみたいな感じかしら。点を自分の知ってる場所と場所に置き換えて繋げる、みたいな感じね」

ヨシツ自分の予想してた通りだ。これで、あの二人を止められる！にしても、知っている場所と言うことは、あの二人のところにも移動させることは出来るだろう。

そうと決まれば、早速やって……

ドゴオドゴオドゴオ

ああ……道場が壊れてく。

序章・第十九話

今さらだが、なんであの二人は全くと言って良いほど周りが見えていないのだろうか？もはやここまで来ると相手が誰であろうが、それが失礼に当たろうが何であろうが言わせてもらおう。一切周りが見えていないのは何故だろうか。

普通、これだけの穴が空いていたら気付いて、打ち合いを止めたりするのではないだろうか？そう自分は思うが、あの二人は見えて一向に止まる気配がない。あれだけ速く動いているから、集中して気付かないと言っても言うのだろうか？

……これでは待ついても意味がないだろう。あわよくば道場の状態に気付いて、止まってくれば良かったのだが、甘かった。待てば待つほど道場が壊れていく。さつさと止めないとまた……

ドゴオ

ああ……また穴が空いた……はあ……

「どう？何かいい案は出たかしら？」

「あ、はい」

無論決まってはいるので、説明する。

正直、豊姫様の能力に頼りすぎてしまったと思う。作戦の大半が豊姫様便り。まだまだ自分の能力には使えるところがあるのに、使いきれていないところに自分の未熟さを感じてしまう。まあ最近やっと、能力の感覚が体に染み付いてきたことを考えれば、仕方がないとは思うけれど、悔しいなあ。波長なんてヤバイもの操るなんて自分なんかにはとても身に余るものだし。

とはいえ、今からやるのは『波長を操る程度の能力』を使うし、道場内全体という結構な範囲だ。操れる前提で考えてしまった。普段、こんなバカみたいに広い範囲を、能力で操ったことはないのです、不安である。まあ、とりあえず操れるかどうかは分からないがやってみなくては、自分の成長にもならないし、目標にも届かない。何よりこれ以上道場に穴を開けさせてなるものか！絶対に止めてみせる！

ドゴオ

……また穴が空いたよ。

○

玉兎用携帯型多目的通信機、要は前世で言うところのスマホに、自身の妖力を込める。90%、91%、92%とスマホが充電されていく。98%、99%、100%……充電が満タンになったと同時にスマホの発信機部分を能力でいじり、発信する電波の波長を最大にする。これであの二人がどれだけ早く動いていても、スマホから出る電波で道場内はイヤホンを使う事が出来る。

「それじゃあ、いくわよ〜」

「お願いします」

さあここからが本番だ。あらかじめ豊姫様に渡しておいた自分の黒のワイヤレスイヤホンを『山と海を繋ぐ程度の能力』を使って、片方ずつワープさせる。そして、ただ離れていようと自分が操れるようにイヤホンには妖力を纏わせている。こうすれば、自分の妖力を纏わせたイヤホンのスピーカーから出る音の波長を操れるようになる。

「3, 2, 1」

ヒュン

豊姫様の合図と同時に手のひらの上にあつたイヤホンが消えた。次にスマホの音量を最大にする。それに加えて、イヤホンから出る波長を操り、音の大きさを更に乗せする。

ドゴオドゴオドゴオ……………ドサツ……………

するとどうだろうか、道場内に響きわたっていた壁や床の壊れる音が、ピタリと止まった。それと同時に、何かが落ちた音が道場の中心辺りから聞こえてきた。

「つつつ……………ああ……………」

道場の中心では、苦しそうな声を上げて、片耳を押さえて、上をむいて倒れている二人がいた。そんな二人のそばには、最早竹刀だったとは思えないほどに木っ端微塵になった二つの橙色の粉の山と、大音量を出しすぎたせいだろうか、黒色のイヤホンが

粉々になって、部品が辺りに散らばっている。

「……っし」

よっし！成功だ。と心のなかで歓喜し、聞き手を振り上げてガッツポーズをする。

まさか、こんなにもうまく行くとは思いもなかった。どちらか一人が止まってくれば、自分にとっては万々歳だったのだが、おありがたく二人とも止まってくれた。二兎追うものは一兎をも得ずと言うが、今回は二兎追うものが三兎も得ると言うぐらいになつてしまっている。つまりは大成功。

自分が考えた作戦としては、まずイヤホンを二人の片方の耳にワープさせる。そこから大音量で黒板を引つ掻くような音を流して、それをさらに波長で上乘せする。そうすると、とんでもない威力の超近距離ショックキャノンの完成である。

とはいえやり過ぎた。そもそも、本来の目的としては、あの二人が止まれば良かったのだが加減がわからず、止まれば良いやおもいつきり波長を上げすぎたせいで、イヤホンを付けていた方の耳は、鼓膜が破裂するまではいってはいないが、かなり痛そう。喜んでいる場合ではない。

とりあえず謝りにいこう。

そう思つて二人がいる方向を見た。が、そこには二人の姿はなく、竹刀とイヤホンの残骸だけが残されていた。

「あれ？」

いると思つたのに消えていたので、起き上がったのかと、辺りを波長と、己の目で見渡す。

「いた！」

道場の端つこの方に二人いた。片方はおそらく豊姫様。もう一人は多分だけど月詠様だろう。何かを話しているみたいだ。よし、謝りにい……いやまて、もう一人はどこに行つた？月詠様が端にいるとなると、もう一人はどこに？波長で道場の全体を調べたはずなのだが、豊姫様と月詠様しか居なかつた。

波長が抜けたのだろうか？もう一度波長を出し、調べてみる。しかし、一向に見つか

らない。隅々まで波長を飛ばしても、人影すらない。一体どこにいったと言うのだ。

道場から出たと言う訳でもあるまい、今度は波長を出し続けてみる。と言うのも、シヨックキャノンを使う為に妖力をかなりの量を消費したので、節約をするために出す波長を減らしていた。まあ、そもそもこんな広い範囲の波長を出し続けていたら、すぐに自分の妖力なんて尽きてしまうから使わない。

そんなだから、途切れ途切れ波長を出していたのだが、これは妖力の節約としては有効ではあるが、動いていたりしている対象であった場合、反応が薄くなってしまうと言う欠点がある。このことから恐らく、先ほどの打ち合いのように、動きまわっているとと思われる。

………は？

打ち合いは終わったと言うのに、何故？竹刀も粉々なのに。一体なにを？位置を特定するために、妖力がすつかからかになるのを覚悟で波長を全開にする。

「いっちに來てる」

道場の南の位から、とんでもないスピードでこちらに近づいてきている。……これ、自分が狙われてないか？でも、狙われても仕方がないか。シヨックキャノンで一般人であれば気絶するほどの波長を当てたから、やり返しとかそういうので来るのは当然。やられても仕方がない。

とはいえ、あんな速度の攻撃。当たったら、俺は即座に道場の壁や床みたいの木っ端微塵にされるだろう。逃げるか？いや、今から逃げても、あのバカみたいに早い攻撃に追い付かれて、結局に肉片に加工される。ヤバい、もう来る！何か策は……！

そうだ！初撃だけ自分の持つている竹刀で流して、あとは出口まで全力疾走！これしかない！

そうと決まれば………！

パン

序章・第二十話

「っう」

レイに何かが当たった瞬間、何百の月の民の兵士たちと打ち合ってもびくともしなかつた竹刀が、大きな音を立てて粉々に弾け飛ぶ。破片が幾つか体に刺さったが、今はそれどころではないだろう。竹刀を破壊するほどの衝撃に為す術はなく足は宙に浮き、慣性に従って飛ばされた。

とんでもない衝撃により脳みそが揺れ、一瞬だけ視界が真っ暗になった。同時に頭と耳に激痛が走り、少し意識が持つてかれそうになったが、深呼吸を何とか持ちこた。そのせいで、とんでもない速度で床にぶつかりかけたが、何とか体をひねり、足を進行方向に向けて着地する。地面の接地感を感じ、そのまま全力で逃げる。

逃げる場所がない。

頭の中にはただそれだけだ。あれだけの衝撃を受け止められる場所など、自分には思
い浮かばなかった。道場の空いた穴は中がどうなってるかわからないし、端の方にある
武器庫は耐久性が心配である上、ここからかなり遠いので付く前にやられそう。そもそ
も、なにやっても砲弾のように飛んでくるため、破壊されそうだし止められそうにない。
だから、このまま走って逃げるしかないのだが、そんなことではまた打ち込まれて今
度こそ失神する。下手したら、竹刀みたいに頭の骨が粉々にされる可能性だってある。
どうにかして逃げ切らなくては……！

そんなことを考えているうちに、また波長レーダーに1つの影が移る。また来る攻撃
を防ぐためその場に立ち止まり、竹刀を構えた。が

「あ、やっべ」

あることに気づき、とつさに横に避ける。

ドゴオ

大きな音と共に頑丈な道場の床に大きな穴が出来上がる。

「危なっ」

竹刀が先ほど破壊されたのを忘れていた。自分が構えた竹刀は、残念ながら柄飾りから先は吹き飛ばされて、無い。これでは受け流すどころか、自分の頭目掛けて竹刀が飛んでくる。替えの竹刀など、あるわけもない。そもそも、竹刀が弾けて粉々になるなど普通はあり得ない。あれはあれでかなり固いのだ。月詠様との打ち合いでも、竹刀が割れたり、傷が付いたり何て事は一切無かったのに。

月詠様は力を抜いて、自分と打ち合っているのは理解していたが、竹刀が打ち合いで粉々になるほど強く振ることが出来ると言うことは、かなり、とつてもかなり力を抜いていたと言うこと。めちやくちや手加減されていたのだなあと言うのには、少し落ち込む。

……つて、そんなこと言っている場合じゃない！早くどうにかしないと！

自分の足と飛行速度では、竹刀の置いてある武器庫には付く前に打ち込まれてジ・エ
ンド。今ここで出せる武器はあるにはあるが、元となる妖力が少々心許ない。ほとんど
カラ。不安である。しかし、今は受けることを考えないと。先の無い竹刀に妖力を込
め、刃のない棒状のものを意識する。するとバシユーという効果音を立てそうな感じ
で、ニューイーンと青色の棒状のものが、竹刀の柄飾りから生えてきた。

急いでまた、さっきのように構え、飛んでくるのを待つ。

「今っ」

パァン

先程受けたので、比較的楽に流すことができた。そのおかげで向こうは体勢を崩し、
転け、あの馬鹿みたいに早い移動が止まった。受け流せたのは、この妖力でできた棒の
おかげでもあるのだろう。これ結構固くてスベスベしているから、表面が竹刀とぶつ
かって滑ったのかもしれない。

これは月詠様との鍛練の時に習得したもの。本来であれば刃を造ったり、鋭くして斬りやすくしたり、様々な武器を簡易的に作成するもので、根本は結界術にある。結界を形を変えて作れるのだが、これがまた難しい。元々、工作は得意な方だったのだが、どうにもこの結界術は苦手だ。

向こうがすくつと起き上がってきて、竹刀をこちらに向ける。

その時、顔がやつと見えたのだが、少しゾツとした。何故かしらないが、口角を上げ、笑っているのだ。波長も見てみるが、なんとも波は高く、早い。つまりは興奮してしているのだ。それは怒りによる興奮ではなく、まるで楽しんでるかのようなもの。自分にとつては恐怖ではないのだが、あちらはとつても楽しそうである。

何故、楽しそうなのか？一瞬よくわからなかった。あんな速度で突っ込んだり、竹刀が粉々になるまでやる意味が良くわからない。何より自分が追われているのは、自分がイヤホンショックキャノンを使い、向こうを怒らせてしまったと思っていたからだ。しかし、良く考えてみると向こうの反応はおかしいものではないことがわかった。

思うに、単純に楽しんでるのだろう。まるで、新しいオモチャを買って貰った子供のように。何か一つの物事を極めるためには、それを好きになり、楽しむことによつて

その物事を極めることができる、と思う。一概に物事を極めるための方法として、楽しむことだけをすればよいとは言えないが。

……そうであれば、自分も楽しんだ方が良いのであろうか。あちらの感情、パツと見たただけだとヤバイものだと思うかもしれないが、剣術を楽しんでいるからこそその感情だと思ふ。だつたら、いまの自分のように逃げたりすることを考えていたら、これ以上の剣術は望めないような気がする。キツそうな鍛練から逃げようとしたり、諦めかけた。そんなことでは全く伸びる訳がない。

そんなことでは困る。

剣術は自分の目標としていることをするためには、必ず必要になつてくるし、自分自身、剣術がうまくなりたいという気持ちはある。何より、このまま逃げるだけでは攻撃を逃がして、逃がして、逃がしてとらちが開かない。

つまり、この状況をどうにかするためには、打ち合うしかないのだ。ビビっている暇はない。向こうはもう竹刀を構え、いつでもこちらに打って来れる。直ぐ様竹刀を……ラ○トセー○もどきを構える。

さあ、どこから来るか。

剣術において大事なものは、相手の剣筋を見ること。それを予想して、動作をとる。自分から振りに行くのはタブーで、相手が動いている隙を狙い、打ち込むスタイルが月詠様の剣術の基本。ゆえに、相手が来るのを待つしかない。恐らく、向こうも月詠様に指導されており、自分と同じように待つのが基本。

だから、この打ち合いにおいて、先に痺れを切らした方が不利になる。自分はその攻撃に耐えて、隙を見て打ち込むことができたら良いのだ。しかし、先程ようなスピードで来られたら、反応出来る自信がない。だが、やらなくてはどうにもならない。出来るだけやってみよう。

双方が剣を構えてから、しばらく時間がたった。しかし、どちらも微動だにしない。構える竹刀は揺れもせず、相手側に向けて止まったまま。道場の端の方で、話ながら打ち合いの様子を見ていた一神と一人は一言も喋らず、二人の剣と剣とのにらみ合いを見ている。

誰も動いていない道場内は非常に静かで、ちよつとでも動こうものなら音が響き、注目はそちらに行くだろう。

ダアン

静寂を打ち消すように、依姫が動く。先に痺れを切らしたのは依姫であつた。依姫も相手の隙を狙うように、待つていたのだが、レイは全く動かず、逆にらちが開かないと思つたのか、先に動いた。

ドンツ

と道場の床を強く蹴り、一瞬でレイの近くに移動する。それに対して、待つてましたと言わんばかりに、受けの体勢をとるレイ。依姫の竹刀とレイの竹刀……ラ○トセー
○ーもどきがぶつかり合い、甲高い音が鳴り響く。

「つう……」

余りの竹刀の重さに怯みながらも、レイは上手く依姫の攻撃を流し、依姫は体勢を崩した。

今だっ!!

レイは全力で竹刀もといラ〇トセー〇ーもどきを依姫の首元へ振りにゆく。渾身の一撃であつた。がしかし、それが当たることとはなく、次の瞬間には、自分に目掛けて依姫の竹刀が飛んできた。全力で竹刀を振つたあとなので、今のレイには隙が多い。その上、依姫の竹刀は超高速。平常時であれば、何とか流せたかもしれない。だが、動こうにもレイの身体は月の兵士たちや先程の依姫の攻撃を受け流していて、もう体は限界。もちろん避けられる筈もなく、その光景を最後にレイの意識は途切れた。

壺章・神の近衛

壺章・第一話

レイが気絶した後の道場の端、イヤホンによるショックキャノンを食べたはずの月詠は、元気そうにレイを担いだ依姫と、ポケーつとしている豊姫を呼んで、労いの言葉をかける。その言葉に豊姫は元気そうに返事をするが、依姫はなにやら不服そうな顔をしている。

「お疲れ様、上手くいったね。」

「上手くいきましたね」

「……………」

再度話しかけてみるが、やはり反応しない。

「依姫?」

「大丈夫かい? あ、ひよつとしてあの波長にやられたのかな。結構強かったしね」

と、からかうように尋ねたが

「……………いえ、そういうわけでは」

こういう風に答えるのを渋るのは、依姫のいつもの癖だ。玉兔とやろうが、月の民たちとやろうが、私とやろうが、打ち合った後には必ずこのように反省をする。良いことだとは思う。

何かしらの物事をした後に見直すのは、個人的には良いことだと感じる。自分よりも実力が上だと思う者にたいしては当然だが、下の者に対しても行っているのは依姫のすごいところだ。

「……………」

顎に手を当てて、全く動く気配がない。この状態では、しばらくは考えているだろう。邪魔するのも悪い、終わるまで待とうかね。

「それにしてもあんなにも強くなるなんて、玉兔なのか信じられないわねえ」

豊姫が話し出す。確かに私もレイがあそこまで強くなるなんて、思わなかった。精々普通の玉兔程度よりもちよつと上、位だと思っていたのだが、見当違いだったようだ。

「まさか依姫の竹刀を受けれるようになるとは思わなかったよ」

依姫とぶつけたのは少しだけ早いんじゃないかと心配していたが、どうやら杞憂だったようで、見事に受け流した。ビックリだよ。

「月詠様の指導のおかげじゃ無いですか？」

「いやーそんなことはないよ。私自身はほとんど何もしていないからね」

豊姫はそう言うが、大半はレイの努力によるもので、私はあまり指導などはしていない。打ち合う位だったからね。レイとやるのは。

確かに打ち合うことも技術の向上になるけれど、結局は基礎がないとあまり意味がないから。私が身を持って知っている。しかし、なんであんなにも努力出来るのか？私なら、力の差に絶望して、諦めていただろうな。

「それにしても、これはやり過ぎたんじゃありませんか？」

豊姫が大きな穴の空いた風に見える道場の床に指をさして言う。

「そうかな？私的には面白かったけれど」

そんな私の答えに少し不満そうにムツとする豊姫。スゴい楽しかったのは良いのだが、これをするには結構大変だったし、八意にも手伝って貰ったし。まあ、彼女は『良い研究になりました』なんて言ってたけど、仕事の合間に手伝って貰っていたから、かなり大変だったと思うし。そういうえば、元に戻すことも考えてなかった。うーん、流石にやり過ぎたかな？

「まあ、あつても無くても、あまり訓練には支障は出ないし、大丈夫じゃないかな？」

「まあ、それでしようけどね」

「ま、良いや。つけっぱなのもなんだし、消そうかね」

月詠はそう言うと、懐から端末のようなものを出し、画面を操作する。すると、穴だらけでボロボロになっていた床や壁が、何事もなかったように、元の綺麗な道場に戻ったのだ。

この装置は、わざわざ月詠がレイ一人を騙すために、八意[×]に手伝ってもらい、設置した立体映像投影機。いわゆるプロジェクトを作成した。月の科学において、これを作るのは簡単ではあるが、レイとの訓練はほぼ毎日行っているので、月詠はレイにバレないよう、たった1日で設置したものである。

「便利ですねぇ、タップ一回で制御出来るなんて」

「だろっ?」

調子に乗って、ボタンを連打する。穴が消えたり、出てきたり。ちよつと目がチカチカしてきた。

「あ、これ、毎回変わるんですね」

「まあ、そうだね。ずっと同じなのも味気ないから、ランダムに生成してるから。因みに、穴以外も映せるんだけど、まだデータとかもいれてないから、訓練用に使うなら、もう少し時間がかかるかな。」

「じゃあ、桃の木とかも映せますねえ」

「いや、本物があるだろう…」

「フフフ、良いじゃないですか、室内に桃の木があつてもね」

「そう言う問題じゃなくないかい？」

「どれだけ桃が好きなのか？少し笑えてきた。」

「まあ、冗談は置いて。これ、戦闘データとかも入れることも可能ですよね？訓練用に使うのだから」

「ああ、勿論だ。私の剣術のデータに加えて、槍術、柔術、砲術その他諸々入れることは可能だよ。データ作るの少し手間が掛かるけど、これで最近の近接訓練離れを改善出来たら良いんだけど」

ほん

「まあ、その点については大丈夫だと思いますよ。流石に月詠様が直々に作った訓練施設を彼らも無駄にはしないと思いますし、一匹の玉兔に全員やられる始末でしたから、そろそろ、自分たちの実力が低下していることに気付いて、訓練しだすんじゃないんでしょうか」

「そうだと良いんだけどねえ…」

道場改造したからって来るかなあ？まあでも、たった一匹の玉兔にやられて、黙って

いるとは思えないし、良くも悪くも、真つ直ぐだから、訓練位はしに来るか。これで改善すれば良いんだけど。

「ところで、どんな訓練を施したんですか？あの玉兔に」

豊姫が興味津々に聞いてきた。

「んーいや、打ち合った位だよ。後は振り方とか、型の組み合わせ方とかね」

「ホントに他のことは教えていないのですか？」

「うん、教えていないよって…もう良いのかい？依姫？」

「はい、大方わかりました」

急に依姫が会話に戻ってきてびっくりした。にしても、早いな、終わるの。いつの間にか豊姫は桃を食べているし、依姫はめっちゃ近くまできて問い詰めてくるし。やっぱ自由だなこの姉妹。

「それで、本当に教えてはいいのですか？」

「そうだよ。ちよつと打ち合ったら、後はレイが自分でやるから、それを見たり、他のことをしたり。基本放置してるよ。たまにアドバイスはするかな」

「成る程…：…見ているなかで、サボっている素振りを見せたりは？」

「んーいや、なかったよ。基本的にはサボったりなんてことは無いけれど、何故そんなことを？」

「いえ、私が見ている玉兎たちは、よくサボるものたちばかりで……月詠様のご指導を受けているにも関わらずサボる等といったことはないと思いますが、実際どうなのか気になりましたので」

「確かに、玉兎たちは職務を放棄して、サボっている話はよく聞くけれど、そこまでひどいのかい？」

「はい……私が指導している手前、言いづらいのですが、実際かなりひどいです。私が見ている間は、見掛けは真面目にやっているのですが、私がいなくなると同時にサボりだしてしまう始末です」

目に見えてわかるほど、落ち込んでいる依姫。依姫は玉兎が真面目にやれば、普通以上の事が出来ると思っている節があるから、落ち込むのはわかる。とはいえ、玉兎の基本的な性格上、真面目にやることは不可能だろう。

最初は私も、どうにかしてやれるように手を尽くしてみたこともあるけれど、どうにもならなかったからなあ……